

女子高生はケーラ・スウ？

くとりあ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

「ケーラ・スウの印象? ……サラダの人?」

私は彼女をあまり知らない。

死の運命を背負う彼女の事を「知らない」なんて、我ながら酷なものだ。

この宇宙世紀では睡蓮の様に美しく散るか、尺取虫の様にもがいて生きるかの二つしかない。

……そんな世界で私は、なぜこんな必死に生き抜こうとしているのだろう。

……はは、もし戻れたらお父さんとお母さんを思いつ切り抱きしめよう。あの、宇宙を駆ける獅子達が唯一出来なかったことを私はしよう。

※原作準拠で話は作っていますがps版だったりギレンの野望だったりの話は書いた後から知ったり触ってなかったりしたのでif設定とタグ付けしました。力不足で申し訳ない。

メンタル弱男くんなので批判感想来たら黙る事にします。駄文ゆえ色々言いたいことは在ると思います、ご期待に添えずごめんなさい人。

目次

プロローグ ケーラ・スウの逆シヤア

ケーラ・スウ

アストナージ・メドツソ

ガンダム

赤

罪

明日

使途

幸せ

牙

一章 ケーラ・スウのエゴイズム

SALLY 出撃

光と闇

霧

1

8

15

24

33

37

45

50

55

61

65

71

プロローグ ケーラ・スウの逆シヤア ケーラ・スウ

諸君。人の後悔は星の数ほどあるというがそれは君自身が体験している通り本当の事だ。

宇宙世紀、時代が変わって人の体に鉛をを討ち込むその手がアームレイカー（ハンドルの一種）越しになっても、鉛をぶち当てるその体が鉄塊になり、人の絶命する様が見えなくなったとしても、誰かを狙うその手が震えるように。もう殺したくないと誰しもが考えるように。

誰もが真夜中に後悔し、歯を食いしばって、泣いて、震える。……無論私も例外ではない。

……後悔。誰かはそれを「若さ」とバツサリ切り捨てるのかもしれない。

……だけれどそれを見つめる、見つめられる強さも人は持ち合わせている。

過ちを繰り返す人類だが、それでも未来を信じ進んでいけるという願いを人は何時か手にする。

一人一人が暖かい思いを、明日を願えば隕石が動く程度の奇跡は起こるのだ……と。

……それは私がケーラ・スウになってみて分かった事の一つだ。

+++++

「……相も変わらず情報不足だな」

とあるコロニーの民間区画で話をしている、男二人。

少々怪しげ漂う二人組だが恐らく想像容易く、すぐに立ち去っていく事だろう。周りからも怪訝な目で見られている。

なぜなら、男たちは血の臭いをその手から、きつく匂わせているからだ。

二人は、決して外見などからその香りを漂わせている訳ではない。

見すると唯の、優し気な好青年とピンと筋の通ったダンディズムな30前後の男性であるが、どうにも染みついてしまうものなのだ。この「香り」というべきものは。

……二人は会話しながら周りを見渡す。

大きな滑り台が目印の少し寂れた公園、子供を見守る母親、狭い住居のベランダから洗濯物を干すために柵に少し乗り出す若者。あまり使われない道路は少しコンクリートが剥がれてしまっている。ここはどうやらあまり裕福な人が暮らす場所では無いらしい。

「だが、奴を止めるには……」

「ここで話す事でもないだろうに。焦るのは解る……。が」

顔を直接動かさず目だけで辺りを見渡しひそひそと話し込む。だが、この様に話せば話すほど辺りの色は険悪になる事を知つてすぐに黙った。

恐らく会話の内容から、二人は散らばったごみ屑よりも価値のない時間を過ごしてしまったであろう事が伺える。

そして、ほんの少しばかり自棄を起こした好青年が滑り台で遊んでいる少年に声をかけた。

「その君、少し話を聞かせてほしいのだが」

少し意外を突かれた子供が、滑り台に向かおうとする足を止める。

……そして、軽く礼をするわけでもなく、逆に睨みつけて足早に母の下へ去って行った。

「……駄目だな」

「ここまで地球のイメージが悪いとはな」

ブライト・ノアは小さく両手を広げ呆れと深刻さを持ち合わせたため息をついた。

……始めは、その行動に批難が溢れた。

猿をロケットに乗せて宇宙に運び、漂わせて着陸させる。

その一見、無意味な行為は、周りから幾ら罵られても絶対にせねば成らない実験だった。

それは、人が宇宙に住むための……誰もが望む「夢」に必要な、礎

だった。

誰もが、空を見上げて鳥の様に飛びたいと願った。

そして何時か人は宇宙そらに昇った。

だけれども、それは望んだわけでは決してなかった。

地球に残ったのは富と権力を持つ人々ばかりで、力のない民は、人口が増えすぎて限りあるものしか住めなくなった地球という星から「間引き」されただけの人類だった。

富裕層から見た、下の物などは全て猿にでも見えたのかもしれない。

そして、望まずして宇宙に昇った貧困層は、発展途上の枯れた土地を見て何を思ったのだろう。きつと、「救い」を求めたに違いない。

「ジオン」という一筋の光に。

「いつになったらたどり着ける……！ シャア……！」

ロンド・ベルのアムロ・レイはその言葉を静かに吐き捨てる。

+++++

町外れのbar 少し古めかしさを模した外装に甘いネオン。そこに久しぶりに来客する恋人同士の姿があった。漏れるのは二人きりの会話、甘いため息交じりの独り言。

「じゃあ、あなたが仕事を始めるようになった切っ掛けは？」

その様は二人の客が同じ酒を酌み交わす様に愛を語らっているようにも見えた。

「古い話だね。そうだな……ただ私は家族が欲しかった、それだけなのかもしれない」

そうできつとこの二人はただの恋人同士なのだろう、素直に見た通りの。しがなない牧師と妖美な女。きつとこれから二人が待ついくつかの未来に胸をときめかす唯の普通の愛……それならばよかったのに。

「ふふ、その家族はお母さん？お姉さん？……弟？」

女の小さなバッグに入りたいやに武骨な通信機が鳴り響く。

「……全てき、もう悲劇はおしまいだ。だから私はまた教壇に立つ」

「……スウィートウォーターへの政治的介入？」

シヤア・アズナブルは疑問の声を漏らした。

新生ネオ・ジオン総帥補佐及び戦術指揮官ナナイ・ミゲルは、自分の手綱を握るべき人間、いや人類の歴史を、未来を指すべき人間。総帥シヤア・アズナブルに課題を提示する。

「はい。スウィートウォーターは我々の拠点と呼ぶに非常に近いコロニーになる事でしょう。しかし、問題があります。それは我々ネオ・ジオンに相反する派閥です。確かに総帥自ら統治するこのプロックはその殆どが整頓整理されると思われます。ですが、ネオ・ジオンを良く思わない人々は必ず出てきます」

……短いため息を着いて、総帥はまるで呆れたように声を漏らした。

「その人々を弾圧する法でも作れと？」

「……それに近い事をしなければ、我々の情報を漏らすのは避けねば。と、思います」

「ふむ……」

拳を唇に当て少し考える。

いや、ナナイの提案にはほとんど賛成と言っていいのだが、自分なりに考える事は考える。

この様な大事に、例え自分にとって興味が無い事であっても、確実に自分の手には一つのコロニーの命全てが、未来が掛かっているのだ。そう易々とその場で判断できるようなことではない。

例えそれは、能力にある程度の信用は置いている、ナナイ・ミゲルであつても、その提案を簡単に丸のみする様な事はシヤア・アズナブルには出来なかったのだ。

……それは民を思つての王としての判断なのか、単に自分の政治屋としての血の騒ぎなのかは本人にもわからなかった。

「スウィート・ウォーターは、その殆どが私に同意しているのではな

かったのかな？だから、ここの掌握も私の名前を出せばすぐに通してくれた」

確かにそうなのだが、敢えてシャア・アズナブルは言葉を濁らせる。その方がナナイという女は細かな指示を仰いでくれるからだ。理性的でいて女らしさも感じさせる。我ながら悪くない女を選んだものだ。

そして期待通りにナナイは説明をした。律儀なものだ。と、心の中でふと考える。

「確かにそうなのですが油断はできません。ロンド・ベルも各コロニーに我々の事について聞き込みをしているでしょう。せめて拠点にするこの土地は意見を100%に近い形でシャア・アズナブルに統制するのは望ましい事だと思います」

全く、よくできた女な事だ。

私の思いど通りに動いてくれる。御しやすい上に私の事と政治を客観的に見ての答えも出す。ある種の男にとっては最高の女の形ではないだろうか？

「ナナイの言うとうりだな。正しい方に着こう」

「……つまりは、政治屋の真似事をやればいいのだろうか？」

「……恐れ入ります、総帥」

+++++

「戻ろうかブライト、このコロニーにはシャアは居ない」

散りばめられたごみ屑をかき集めて出来た情報は、それより少し大きくなった紙くずの様な結果しか生まなかった。ふりだしにまたも戻されたブライト艦長率いるロンド・ベルのエース、アムロ・レイは苛立ちと落胆を押し付ける。が、それを匂わせない言葉遣いでその場をしのいだ。

「コロニー側は、もうシャアの手が回っている様だ」

実る事が在るのだろうかという希望だけでは桃の花は咲かない。水を如雨露で組み入れ毎日与え続けなければならぬのだ。

井戸水をくみ上げる手間暇を、何年も続けてやつと人は桃の実を手にする事が出来る。それを知る、そしてそれが出来る「執念」が必要なのだ。燃やさなければならぬのだ。

それがまるで自分の命を削るような行為であっても。

「シヤアを倒さなければ、俺は死に切れない。ブライト」

「……チエーンがそれを聞いたら悲しむ、アムロ」

ブライト・ノアには、その言葉を諫める事しかできなかった。

「……？」

……ふと、アムロがラー・カイラム内で通り過ぎた女性士官を目で追う。

それを優秀な指揮官ブライト・ノアが少し笑い、指摘した。

「おいおい、チエーンの話を持ち出したのにそれか？」

……だが、茶化されたその言葉を放り捨てて、何時もの「アムロ・レイ」らしからぬ行動をとった。

「……君！」

ラー・カイラムの、同じ船の、命を共に預ける仲間を不仕付けに呼び止めたのである。そして、通常ならば決して在り得ない、まるで新兵の様な行動をとった。

「……名前は？」

ラーカイラムの船員は百を超える。そしてそれを全員覚えているかと問われれば、船員は当然「覚えている」と皆言うだろう。

それほどまでに、命を預ける仲間は尊重して接するべきなのだ。

そして今、その「当たり前」を犯してまで口にした疑いの言葉は、たとえ相手がアムロ・レイであっても、失礼という言葉があて嵌っている。流石のブライトも困惑した、口説き文句ではない事は声の様子で解る。しかし疑問しか浮かばない。この船員の名は……。

黒髪長髪、目は少し釣り目、兵としてはとても若い、コスモスの花が似合いそうな女。

そもそも、戦場に置いて女性兵はかなり少ない。その中でもパイロットをやる女性などは、一握りだ。乗船しているとごく自然に、いや、まず間違いなく、いの一番に覚えるだろう。

そんな、不自然さを覚えたブライトが、アムロ・レイにその乗組員の名を告げる。

「何を言っている、アムロ？」

……そしてブライトはそれがまるで当たり前の様に言葉を続けた。

「……「ケーラ」だよ。……「ケーラ・スウ」

……そう言われ、振り向いた黒髪長髪の女は、我々が知っているケーラ・スウという女性の、金色で短かく切り揃えた髪とはまるで一致しない。勿論顔も違う、ヘアスタイルどころか、身長も、何もかも、全てが。

……そして、眉一つもまるで似ていない別人を指してブライト・ノアは続ける。

「……忘れたのか……？……アムロ・レイ？」

アストナージ・メドツツ

「……ただいまー」

いつも見慣れた玄関のドアを外から開けて、子供の頃から数えて何百回と繰り返し返したのか解らない挨拶を私は声に写す、そんな誰かの屍が作った幸せを享受する私。

……だが返事が返ってこない。

ふう。とため息を一つ。靴を脱いで、トイレが横にある廊下を抜ける所ですらやく挨拶が返ってこない理由を思い出す。

「そういうえばお父さんとお母さんは夜まで出かけてるんだった」

ちなみに両親が不在なのは、少し前に頭を打ってしまった祖母の病院に一応の心配だからと医者に迎えに呼び出されたからだ。

祖母については何もなかったことを祈っているが、今現在不安に思っている事と言えばそのことくらいか。

そんな事しか、考えられない私はきつと両親の愛や友達、出会った人々に支えられて居るのだろう。

現に「あの世界」に行くまで私は、誰かを殺して恨まれることも、殺さなかったことで守れずに死んでいく誰かの命も、その消えゆく温もりも知らなかった。

制服を脱いで、汗を流すためにお風呂に入り。そしてパジャマに着替えて少し眠くなってしまい両親が返ってくる前に一早くベットに潜る。勿論ここで、小さな抱き枕は欠かせない。

普段は一緒に生活している両親が不在という、ちよつとだけ変わった何時もの日常、平日の、あたりまえの日々の一つ。

通学した適度な疲労感が横になると一気に解消される。この瞬間が私の至福の時である。

いい気分だ、こんな時は歌でも歌おうか。

そんな、歌を歌うために都合の良い思い出を振り返った時について最近友達とカラオケに行ったことをポンと思い出した。

私はあまり歌が得意ではないけども、歌うという行為はとても好きだ。

そんな私はよく、周囲を気にせず口遊んでしまう。そんな所が子供っぽいとはよく言われるが、それでも好きなものは好きなものなのだからしょうがない。

ちよつと前に大流行したヒプマイ……というのはいまいちよくわからなかったが、あのクールな美声の速水奨がラップを奏でるとは、過去の私にそのウマのメッセージを送ったら全く信じないだろう。

……それで、誰か急にビーバードを歌い出して……。

ふと、ポロポロと流れる涙の様にその記憶を思い出す。否、思い出してしまう。

「あてもなく、落ちていく星の輝きは嘆きに似て」

口遊むと、とてもノスタルジックな歌という事に気付かされた。非常に練られた構成の歌詞だ。それを私程度などが口にするとは……。何だか申し訳ない気分になってきた。

「……あれはガンダムの歌だ。アニメ映像ついてたし結構面白そうだった。懐かしいなあ。昔、上級生のお兄ちゃんたちと一緒に見ただけ。あの頃はぐりぐり動いているロボット見ただけで興奮したなあ」

「久しぶりに一気見しようかなあ」

一人で逸れた話に花を咲かせているとふいに懐かしい曲が脳裏によぎった。

それを声に出せるほど思い出して恐らくサビの部分の口にする。

「……平和より、自由より、正しさより、君だけが望むすべてだから」目を瞑りそのフレーズを何年かぶりに奏でた。

懐かしい思い出だ。昔上級生たちと躍りになって見た機動戦士ガンダム逆襲のシヤアという映画作品。

ファーストガンダムの続編で、世界に絶望したシヤア・アズナブルが隕石を地球に落とし地球を破壊しようとする。そしてそれを止めようとする人々の物語だ。

その作品には様々な人の心情が、信念が溢れていた。

隕石を止めようとする人々。

シヤアに救いを求める人々。

戦争に巻き込まれてしまう子供達……。

「……懐かしいなあ、曲名は確か……」

そう言つて、私は静かに目を瞑つた。

……

……

「……………」

何……？

「……ラ、……！」

頭の中でもやもやした声が響く。いつの間にか寝てしまつたらしい。私以外に誰かの声がある。どうやらお父さん達が帰つてきたようだ。しかし何事だろう、正直少々騒がしい。

「……ーラ……！」

……何故か目が開かない。瞼が鉄の様に重いが不思議と不快感は無い。

……このまま深く、深く、深く、眠つたら……どうなるんだろう？

私は、死んじやったりするのかな？

「……ろー！」

……うるさいなあ。もう、お父さん叫びすぎ。……お父さん？

「……………どうした！ケーラ!!」

……違う。全然違う。……お父さんの声じゃないっ！……誰!!?

そう叫びながら、足を振り子の様に遠心力を付け飛び上がるように目を覚ました。

……不機嫌に目を覚ました私は「それ」に肝を取られた。

……部屋が全く違う。

私の部屋はこんなに狭くなかった。
間取りが違う。まず私の部屋の形ではない、こんなところに壁なんてなかった。

置物が違う。学校に必要な教科書類が一つも残っていない。化粧品類はあるにはあるがお店ですら一度も見た事の無いような容器に入っている。

部屋の温度が違う。私は寒がりなので誰も居ない状況では温度を高めを設定する。ここはとても寒い。決して私の好みの調整ではない。

周りを少し見渡した結果、部屋というより独房に近い。こんな無機質な部屋でよく私はすやすやと寝ていたものだ。

そして、私が転がっているベットの隣にはモニターと会話機らしき物が設置されていて、画面がぼーっと光っている。そこから名前を呼んで少し荒いでいる声が聞こえる。

「ケーラー!?大丈夫かい!ケーラー!」

……ケーラー?誰?

呆けた頭を必死にたたき起こしているのだが、いまいち脳に理解が追いつかない。

冷房のとても効いた部屋に居るのにもかかわらず体中に冷たい汗が噴き出してくる。

そうしていると通信機の明かりから男の叫ぶ声が先ほどよりも必死な声色で迫ってきた。

「ケーラー!どうしたの!ドアを開けてくれ!!」

その声と同時に分厚い扉に叩いた様な衝撃が何度も走る。

「ひっ!?!」

……それに思わず声を出してしまった。

勿論、通信機で叫んでいる「誰か」にも聞こえてしまっていたようだ。

「……いるの!?!顔を見せて!!」

そう叫ぶ男の声は必死で、そのような声をあまり聞いたことが無い私は足がすくんでしまっていた。

……叫ぶ男の得体の知れない声に私は震えるばかりだった。

急にどこなのか解らない場所に監禁されたのかとも思ったし、だったらこの閉鎖された場所に閉じ込められた意味が解らないし、それだったらこのドアで叫んでいる男は時間がたてばこの部屋に入ってくるだろう……。

まるで意味が解らなかつた。

急に自分の静かな安息の場所が犯されたことに、私は動揺し頭が回らず何もできずにいた。

誰か解らない男の人が、誰かもわからない人の名を呼び、何処かも解らない場所で叫び声とドアを叩く音だけが響く。

扉を叩く音はどんどん強くなる、怖い。

青ざめる私は恐怖でもう考えることも碌に出来なくなっていた。

冷たくなった体を両の手で抱くようにして、ベットの上で足を畳み混乱した頭を落ち着けようと必死になるがいくら時間をかけてもその様な事では永遠に解決しなかつた。

……そうしていると、震える私の手の平にぐっぐつした何か冷たいものを感じた。

小さくなつた瞳をそちらに寄せてみると、手には合皮で包まれた金属の切れ端のような物が強く握られている。

なぜ私はこんなものを手に握っているのか解らなかつたし、気持ちが悪いので投げ捨てようかとも思った……けれどもそれは、冷たい金属のはずなのになぜか温かみを持っていて、握っていると私の心まで少しずつ温かくなつていくようなモノのように感じた。

(……大丈夫、彼は良い人よ、貴方を思っているわ)

それに気付いた瞬間、その金属片から優しい、穏やかな海の様な声が聞こえる。

聞こえた気がした、という曖昧なものではなく確実に聞こえた。いや、心の中で響いたのだ。

(だれ？怖いですが、助けてください……)

突然降ってきた声に驚いたのだが、気にしている暇はなかつた。私もその響いた心の中で涙ながらに自分の考えを訴える。

返事が返ってくるかなんて全く分からないし、そもそも私の勝手に思った妄想かも知れないが、もうそれしか手段は残されていないように感じた。

祈るようにその答えを待つ。

(……ふふつ、怖くないわ、あの人は決して普段こんなことをする人じゃない。あなたを何よりも大切に思っているからこうしているの……)

(……扉を開けてみて？怖い事は、何も無いんだから)

とても無責任な言葉と思ったが、何故かその言葉は信じるに値した。それほどまでに暖かさを、まるで母親のような暖かさと強さを持つ優しい声だった。

手に持った金属片を見えないように仕舞い。恐怖で凍り付いていた足をまるで何かにとり憑かれたかのように扉まで運び……。

……震える手で扉のスイッチを押した。

……扉を開くと真ん中に涙を流している男性が、はつと言うような顔をして大きく安堵のため息を着く、そしてその周りに、声を聞いて駆け付けて集まってきたのであろう制服を着た人々が集まっている。

「……よかったよ、ケーラ。頭が痛いって最近言ってたから、もしかして……って……」

……ケーラ？また言った、誰？

その事について考えるより先に、真ん中に居た作業服を着た男が親しげに手を取り安堵の表情を浮かべる。勿論ものすごく驚きはしたがどうやら先ほどのアクセサリーから聞こえてきた声の通りに悪い人ではないらしい。

「よかったな、アストナージ」

「ああ、騒いですまなかった。様子を見るに大丈夫みたいだ」

そう、男が言うと念のために優しく私の身体の様子を聞いてくる。怪我は無いのか？どこか打って倒れていたのか？眩暈はしないのか？等々。

その言葉を聞いている途中に安心から腰の力が少し抜けた。こん

な風に初めて男の人に涙ながらに手を握られ心配されると、流石に先ほどの恐怖も相まって心音が穏やかではない。

「……良かった何もない様で。……でも、下着で寝る癖は艦内では治してって言ったろう？」

「——っっ!!」

先ほどの恐怖から解放された私は、この精鋭集まる船ラー・カイラムのチーフメカニックマン アストナージ・メドツソに真っ赤になつて平手をかましたのだった。

ガンダム

「ここは、あの映像作品に似ている…… いや、間違いなく一緒だ。……機動戦士ガンダムの宇宙世紀の世界…… 時系列は逆襲のシャア初期……!」

関係者以外の侵入を許可されていない資料室で、私は1年戦争のホワイトベース隊、別名「第13独立部隊」から今現在までのシャアを追いかける「ロンド・ベル」の働きをデータディスクで目に捉え、震える声でそう言った。

地球連邦政府高官ジョン・バウアーが設立した組織「ロンド・ベル」。そしてそれより前にシャア・アズナブルが恐らく「ネオ・ジオン」を設立している。

ロンド・ベルの目的は、地球を破壊すると宣言したシャアを見つける事と阻止。この船はシャアを追うために2年の時を使い追いかけていた事。

……までが資料には事細かに書かれている。

そして私は、その続きを子供の頃に見た範囲内で知っているのだが、それは今はどうでもいい。

もし、これが「逆襲のシャア」の世界なら……。

「……アストナージさんは死んじゃうの？まだ会ってない人たちも、みんな、みんな……」

そして、その中に洩れなく自分も含まれていることに気付くのにその時間はかからなかった。なぜ、この世界に突然割り込んだ自分が死ぬ事になるのが解るのか？

それは、この世界の人は皆、自然と私の事をこう呼ぶからだ。

……「ケーラ・スウ」と。

アストナージさんも他の人たちも皆、私の事をまるで古くから知っている人のように接してくる。勿論私にとってはその人たちと会った時は無い。まったくの初対面だ。

そして誰もが私と会話して言うセリフは「初めまして」ではなく「な

んだか大人しくなったね、ケーラ」

……その時は、苦笑いでその場をしのいだのだが、やっぱりおかしい。ここに居る人たちに何か違和感を感じる。

……ぎっくり言つて、このロンド・ベルに居る人々は私との話す距離が近すぎるのだ。それで私の性格をケーラ・スウという人物と同じと思つている。そして私を見て、私と認識しているのに「ケーラ」という名前を使つて私を呼ぶ。

私の知つている逆襲のシャアの「ケーラ」は見た目は全く私と似ていない。私は髪は黒いし、顔も映画で見た限り雰囲気すら似ていない。言動も私より少し男っぽい。

なのにみんな真面目な顔で、クスリともせず「まるで私がケーラ・スウ本人の様に接してくる」

……なるほど。

どうやら、細かい根拠はないが、私を誰かと人違いしているんだとか、私だけ記憶喪失だとか、私の今までが幻とかではない様だ。

ここまでの事だけで判断すると、私はケーラ・スウと同じ立場に、同じ人間関係に、同じ人生に入れ替わつたと考えるのが正しいか。

にわかには信じがたいが、鉄の切れ端が語り掛けてきたという普通なら在り得ない事実を先ほど体験したばかりの私は、今ならなんでも信じられるような気がした。

「どうしてこんな物持つてたんだろう……?」

今は何も語りかけてこない鉄の塊を取り出す。

確かにこの金属の事は気にはなるが、先ほどの手助けしてくれた事を見るに悪いものではないと判断しよう。

……それなら今、私がやる事は。

私を、ケーラを襲い来る脅威に対策を立てる事……!

さつきまで、良い人相手ににぶるぶると震えていた格好の悪い私は、これから来る本当の脅威を見据えた。

いや、今さつきで格好の悪い私を経験してよかったのかもしれない。その経験のおかげで今の未来について考える強い私に進化したのだから。

そして今すぐやる事は機動戦士ガンダム逆襲のシヤアの作品で起こる事。いや、「これから起こる未来の事」を細かく思い出す事！そしてその打開策を見つけ出す事！

小さい頭を軽く叩いて子供の頃熱くなってテレビに噛り付いて見た逆襲のシヤアを思い出そうとする。

えーと……。まずは私の事……。ケーラ・スウは……。ロンド・ベルのパイロットで、えーとえーと……。

必死で自分の中のケーラ・スウ個人を思い出す。

サラダを食べる約束をして……。そうだ！確か、アストナージさんの恋人……！

「!!?」

失礼ながら、驚いて嘔き出してしまった。しばらく間を置き冷静になる時間を取る。

「……てことは、私はアストナージさんと恋仲なの!?!」

だめだ冷静になれない。今更になって、さっきまで話していたアストナージさんや他の人の態度を思い出すと、確かに距離が近かったかもしれない。いや近すぎたかもしれない。

「えーっ!?!えっ?ええっ!?!」

いきなり初めての彼氏が出来てしまったらしい事に、先ほどより進化したはずの私はえらく動揺してしまう。

足を畳み、頬を赤らめてそれを両手で隠すようにして無重力の空間をぶかぶかと漂う事しかしばらくの間は出来なかった。

そして。

「おー、いたいた!」

いきなりそこにたまたま居合わせたかのようにアストナージさんが資料室のドアを開けてこちらを見て私に話しかけている。

今話題のご本人に会ったのだ。私は相当、動揺と混乱を先ほどと同じ様にしたのだろう。正しく無様という言葉が相応しい。

「えっ!?!なんでここに居るの!?!」

無様な私が声を荒げると、アストナージさんはちよつとだけ驚いた顔をしたが、笑いながらすぐに答えてくれた。

「いやね、君にちよつと話があるものだから……」

……どくどくと流れる血を抑えるように声を静める。一体何を言われるのか？私に覚えはないがアストナージさんと私は恋人同士という関係だ、なにをされても基本的に文句を言える立場ではないが、私個人にも勿論意思がある。アストナージさんは決して悪い人ではないが、何にせよいきなり過ぎる。

私は、黙って次の言葉を待った。

アストナージさんは私の顔を見てふうとため息を着き、真っ赤になつている私の傍まで寄つて、聞こえないように顔を近づけ、深刻そうにこう言った。

「……君、ケーラじゃないね？」

凍り付くような質問だった。

……正直に言うのか、隠すのか。私はこれからの未来を決定づける一手を今ここでしなればならない。この一瞬で両方の損得を私は考えなければならぬ立場に追い詰められた。

……正直に話せばアストナージさんは力になつてくれるかもしれない。そうすれば未来を知る私が上手くやつて、アストナージさんやアムロ・レイが生き残る全く新しい、より平和な世界を作れるのかもしれない。

でも、それは逆に言えばシャアの最終目標アクシズ落としを止められなかったり、私が、ケーラ・スウが初戦で犬死にしてみれば、アムロ・レイに次ぐ実力のケーラ・スウが居ないという状況にラー・カイラムは追い込まれる。そうなればブライトさんや船の乗組員が全てが戦死してしまうかもしれない。そうすれば地球も終わる。

つまり例えば、この後すぐ起こるシャアの5thルナ落とし。映画には描かれてなかったが私も恐らく出撃するだろう。これを最悪しくじれば、私はすぐ死ぬ。そしてこの時点で私が死ねば、戦力がただでさえ不足しているラー・カイラムは次の戦闘で落ちてしまうかもしれ

れない。そうなれば……。

地球は破壊されてしまう……!。

……逆にここで違うと嘘をつけば、私のできる範囲内で未来をほんの少しだけ変えられる、もしかしたらケーラ・スウが死ぬ未来だけ回避して後は映画どうりになるかも……。

……どちらを選んだらいいの!?!この世界に堂々と介入するのならかなりリスクは高い。けどしない方も私個人で抱え込んで何とかできる規模の問題なのだろうか？

頭がこんがらがってきた。これでは目の前に居るアストナージさんに疑問を抱かせてしまう。

何か考えなくては、何かいい方法を……。

何かより良いアイディアを……。

「……はは。やっぱりケーラじゃないね!」

「!!」

アストナージさんの凶星の言葉に全力で反応してしまった。これ以上は流石に無理。回答が遅すぎた。頭で考えすぎるあまり見た目にも出てしまっていた。私は非力だ、こんな事では、何も成せはしない。

……こんな程度では生き残れはしない。この非情な世界では。

絶望した表情の見守る事しかできない彼女を見てアストナージは笑い、不安を取り除いた。

「いいよ、誰にもまだ言っていない」

大きく安堵の息をつくケーラではない誰かを見てアストナージは確信する。

「はは、おかしいと思ったんだよなあ……。ケーラが下着でビンタつて」

軽く笑いながら目の前に居る少女とケーラ・スウの違う所を指摘するアストナージ・メドツソだったが。

「あいつがビンタする……って時は、……メカニックマンの俺とつり合ってな……いつて言われた時だけだもんなあ……今どこに……」

自然と涙が零れ、赤の他人に昔話をしていた。

……その様子には私は謝る事しかできなかった。

……そうなのだ。私は。自分が、入れ替わったという事ばかり気にして、今までケーラ・スウと関わってきた人の気持ちを全く考慮していなかったのだ。

私に親と友達が居た様に、ケーラさんにも親と友達、そしてアストナージさんが居たのだ。それを毛ほども思えず自分の事を心配してばかり。

何が「地球は壊されてしまう」だ。何が「ラー・カイラムは追い込まれる」だ。

結局私は、自分の安定した世界の心配をしていた。ただそれだけだった。ケーラ・スウという人間が築き上げた大切な物をなにも思わず、自分の安心だけ、生きる道だけ模索していた。

これは、なんと恥ずかしい事だろう。

「……ごめんなさい、アストナージさん」

本当に自分が嫌になる。この程度しか悲しんでいる人に言えない。私がケーラさんを、この人の恋人を奪ってしまったかもしれない。

「……いいいさ……ただ聞きたいことがある」

涙を軽く手で拭い、一息ついてアストナージは真面目な顔をして話を元に戻した。

「……ケーラはどうしたの？どこに行った？」

それに私は、満足な答えを持ち合わせていなかった。ただのその場のしのぎの言葉を私はアストナージさんに情けなく報告する。

「解らない……です。私も急にこうなって……。でも、ケーラさんは生きてると思います」

アストナージさんはそれを聞いて、僅かに目を細め、下唇を吊り上げる。私はその顔を知っている。泣き出しそうな顔をぐっところえている表情だ。一瞬苦しそうな顔を隠し、すぐに元の陽気でお調子者に戻り私の事をこう評価してくれた。

「そうか、悪いね責めるように言っつて、君はいい子だ。」

「話しているとわかるよ、君はケーラじゃない。けれど人の事をちゃんと考える人だ、だから俺から君に何も言えない」

「……っ！……私はず！」

言っつてしまひそうになる。「私は貴方達のこれからの未来が物語に書いてある部分だけ解る。そして、このままだとアストナー・メドツソは死する運命にある」……と。

それをアストナーは少女の両肩に手を置き宥めた。

「恐らくその言葉はゆっくり考えて言う事だ。ただ、信じるよ。ケーラと入れ替わったんだ。俺にとつて何か縁があるんじゃないかと思う」

……泣きそうな顔をしながら私は一人で、アストナーさんに「気分転換に」と言われた場所へ向かう。

通路は狭く、おまけに難解な艦内地図だったが、何故か私にはスラスラと読め、そこにたどり着く。

そしてそこを案内してくれた意味は、今にも泣いてしまひそうなひどい顔の私を笑顔にするためのアストナーさんの計らいだと着いて分かった。

「すごい……」

大きな大きな機械の塊が、目の前にどん。と置かれている。そしてその鉄の塊を流れるように下から順に眺めてみると終わり際に更に太い塊が……。

「……ああ、これMSの腕だ、腕から肩までの……わあああ」

無理やり反応を大きくして、悲しい気分を吹き飛ばす。「悲しまないで」と後に言っつてくれたアストナーさんの思いを無下に出来ず。半場無理やりケーラさんの事はこの時ばかりはわざと考えないようにした。

「……シエガンだ」

流石に、こんなに大きな物がこんな大きな基地に、ここまで綺麗にメカ臭さ丸出しでそろつていると壮観だ。どうやら私は男心も少し

持っているらしい。

……だがしばらく経つてよく見てみると、そのMSデツキにはジェガンタイプのMSしか配備されていない。まあそれはそれでソソる人もいるだろうが。

基本何にでもニワカな私はもうちよつと変わり映えのあるMSも見なくなる。

しばらくしてジェガンに飽きて他のMSを探し出した時だった。

「別のは無いかなあ……」

そうしていると奥の方にジェガンとは違う、何か見覚えがある様な機体を見つけた。

どこか見覚えがある、その機体。すぐには解らなかったが少しずつ歩いて行つてよく見ると頭の後ろに角らしきものがある。

「……ガンダム」

……涙を何とか忘れて、エースの機体を見て、少し気分がよくなった私に、その機体のパイロットが語り掛けた。

「君！」

ぎくりとしたその声には聴き覚えがあつた。私の世界に住む人なら半分以上は声を聴いただけで解るだろうその人。

……ただ、その声は皆が知っている声色よりずっと凛々しく、大人びていた。

「……名前は？」

私に問いかけるその声の主は、その人の隣に居た「ロンド・ベル」のブライト・ノア艦長が答えてくれた。

「何を言っている、アムロ？……ケーラだよ、……ケーラ・スウ忘れたのか？」

流石に鳥肌が立った。私ごときなどが決して躲せる気はずがない。この人からは、絶対に。

「ケーラ・スウ……か」

すべてを見透かしたような目で、アムロ・レイはこちらを睨む。

それは、今まで一緒に戦つてきた仲間への信頼からくる威圧という言葉。

「……何故涙の痕がある？ ケーラ、君がそれを付けたままデツキに来るなんて、アストナージが黙ってないはずだが？」

赤

「……アムロ、何をしている？ それは艦長としても見過ごせない」
ブライト・ノアはその様子を、自分の部下を根拠もなく疑うその様子を静視してみても居られる男ではなかった。それは例えホワイトベース隊からの付き合いの戦友、そしてのちに伝説のエースと言いつづられる男でもそれは同じことだった。

「……」
気まずい静寂が訪れアムロ・レイは黙り、ブライトを軽く見た後、恐らくのケーラ・スウの顔をじっと見つめる。

ブライト・ノアはそれは昔、よく見た光景だった。アムロ・レイが、自分は正しい事を突いているのに周囲が認めてくれない時、自分の中で気持ちが悪く混ぜになってしまつて不器用な言い回しになってしまふその癖。

「……ブライトは息を呑んだ。
「……いや、……すまないねケーラ。不仕付けな事を聞いた、アストナージには言わないでくれよ」

そしてその小さな緊張の最中、アムロ・レイはその顔から急にまた何時もの優しい気な笑顔に戻り、その顔に沿うように軽くジョークを一つつけた。

未熟だったアムロ・レイはもう居ない。

そんなブライトの不安を拭い去る男に、モビルスーツ隊の長らしく、いや、後の伝説とまで言われた男の名に違わぬ器をアムロ・レイは長い戦いでとうに身に着けていたのだった。

……。

……。

「……っはあつ！ ……はあつ！」

アムロ・レイが通り過ぎた後、私はいつの間にか止まりかけていた呼吸器官を活性化させた。

……間違いなく危ない橋を渡った。

これからもこんなことが頻繁に起こる。早く、少しでも早くこの世界に干渉するの否か決めなければきつとこの様な状態は私が死ぬまで起こるのだろう。

「死ぬ……まで……？」

……今、ようやく理解した。私は危ない橋を「渡った」のではない。恐らくまだ「渡っている」のだ。

……少し踏み外せば、この世界の破滅という地獄と隣り合わせの危険な橋を、私は今渡っているのだ。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

宇宙世紀0093年2月27日。

地球とコロニー、その両方が驚愕する、あるビックニュースが出回った。

それはとある人物が、地球連邦政府を糾弾するインタビュー動画であり、その記録媒体は後の貴重な歴史資料としていくつもの端末に記された。

高官が連邦を非難するだけであれば、その様な動画はありふれている。すぐに時の中に消えゆく一陣の風だろう。だがしかし、その質問に答えているその、ある人物が問題だった。

ジオンの純粋な血を持ち合わせ、戦争の引き金を引いたザビ家をたった一人で打倒し、世界を破壊せんとするティターンズの悪行を世に広めたその人物。

……シャア・アズナブルがネオ・ジオンを率いて地球に宣戦布告した動画である。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「……動きがあったというのは本当か？ブライト？」

先ほどの有耶無耶を無かったかのように、だがしっかりと心に留めて、アムロ・レイは無重力下の壁を蹴り、ブライトの座る横まで来た。

ブライトの方はと言うとその言葉を受けては居るのだが視線を合わせずに、静かに艦内モニターを睨む。

いや、間違いだ「それ」を睨んでいるのはブライトだけではなかった。今は先ほど声をかけたアムロ・レイも、だけではない。このブ

リッジに居る全員が船のモニターを見ている。

……そしてそのうちの誰かが声を漏らす。

「……5thが……動いてる……!」

見ていたのは、数時間前のとある映像。ネオジオンに電撃的に占拠された、小惑星の成れの果てだった。

「……一瞬だったそうだが、敵と言えど素晴らしい手際だ、さぞ優秀な指揮官が居るのだろうよ」

ブライト・ノアがまるで呆れるかのように褒めると、アムロ・レイはこの場の誰よりも速く直感した。

「——シャア」

……その名が口から漏れ出た時、瞬間全てが凍り付いた。

まるでその言葉に呼応するかのように赤いMSが写ったからだ。

誰も見たことが無いそのMSに Rond・ベルは釘を打ち付けられたように動かなくなった。

その、赤い鷲の様な機体に連邦軍墨付きのMSジエガン部隊が交戦に入ろうとした刹那……閃光と共に塵と化する。

残った赤い機体が、遠く離れた方に次々にか細い光を放つと、ジエガンが触れる事すらできなかつた「それ」の周りに小さな光がぼつぼつと……湖の気泡の如き儚さの様に散っていく。

一切の反撃も、否、自分を殺めた原因すらも解らず消えていく命の様子。その様子はもう戦いではなく、一方的な虐殺に近しかった。

「シャア・アズナブルは生きていた……か、解つてはいたが、ようやく実感したよ」

ブライト・ノアは苦しそうに牙を剥き深く、深く大きく息を吐いた。

—————
数時間前。

「5thを奪うのは重要な任務になる、……私も出よう」

舞台上で主役の前では誰一人声を挙げる者はいない。静まりかえった艦内でシャア・アズナブルがそう口にすると思嘆の声が上がった。

脇役の高官たちが立ち上がり、次々にイエスと言葉にしたが、同時

に疑を呈する者達が居た、ホルスト・ハーネスとナナイ・ミゲルである。

ホルスト・ハーネス……彼の政治に置いての手腕は非常に高い。なぜならそれはジオンの再興という己が信念ともいえる「夢」を持っているからだ。彼の性格は決して良いものではない。が、この話になると答えは変わってくる。

そもそも彼は、生粋のジオニストである。ジオン設立からその身を置き、尽くしてきた。

ダイクンの死後、敗戦から今まで何回もジオンは残党とまで名前を変えて連邦軍と大規模な交戦をしている。しかし彼はそれに静観を、我慢を続けた。

何故なら、それらは全てジオン・ズム・ダイクンが望んだ事ではない。己が信念に反するような気がしたからだ。彼は何時も己が信念を見定めてきた。今まで起こしてきたジオン「もどき」の行動は彼の心には響かなかったのである。

だから、多少の手助けはしたもののそれ以上はしなかった、自分の心に眠る忠義の炎はメラメラと熱く燃えているのにも関わらず静観を続けた。

……ジオンの遺児キャスバルが現れるまでは。

ホルストは賛同者たちを邪魔な羽虫の様に押しつけ、静かに、だが重い声で漂っていた活気を静める。

「……いえ、総帥。失礼ながら出撃は許可できません、ここは我々を信用して頂きます」

賛同していた高官たちは手を止めホルストの方を見る。

もし、他の者がこのような冷水を差す真似をしたら出る釘は打たれるのだろう。

だがしかし、今回は優秀かつ何よりもジオンズムの塊であるホルストが賛同を押し切ったの意見であるから、だれも次の言葉を言えないでいた。

「私も、その意見に賛成です。総帥、お止めになった方が宜しいかと」
次ぐナナイ・ミゲルまでも反対したのだから、先まで賛同していた

高官たちは立つ瀬がない。

「シャア・アズナブルとしては周囲の賛成で押し切る目論見もあったのだが、やはりと言うかこの二人は賛同しなかった。それは何故か？ 簡単な事だった。」

「総帥、貴方はネオ・ジオンの全てです。貴方が発起しなければ私達は一生狭い岩石の中で眠る唯の猿人です。どうか、ここは押さえてください。重要な作戦ですが、我々だけでも遣って退けられます」

「シャア・アズナブルという存在が唯一無二だからだ。だからホルストが火を焚いて、自分たちを猿とまで呼びシャア・アズナブルに縋る。そして最後にここまで言った。」

「我々を信じてください」

感動的なまでの愛国心からくるそれは、妄言なのかもしれないが理には適う。自分たちを埃の様に扱ってでも止める。なぜなら今は、シャア・アズナブルと言う男の徹底的なまでの安全を作るのが彼ホルスト・ハーネスの全てであるからだ。

「……そうか」

「シャア・アズナブルはその熱意に静かに頷いた。」

「だがしかし、ここで終わるほど彼は自己犠牲に駆られてはいないし、我が薄いわけでもない、例えこの世の全ての人間が自分を否定しようとも、本当に大切な者さえが認めれば彼はその腕一本で数億人分の働きをしよう。」

「……ただ彼が認める大切な人々は、その殆どが血に濡れていた。ただそれだけの話だ。」

「……ホルスト、正直に話せ。成功の確率はどの位だ？」

「そして続けて冷酷に、絶対に返せない文句を付けた。だがあえて、あえてホルストは力強く答える。」

「100%です。艦からとは言え総帥自ら指揮するこの作戦、失敗は有り得ません」

「……嘘だな」

「シャアはその力強く答えた虚勢をいとも簡単に切り捨てた。」

「ネオ・ジオンは、その多くが私に付いてきてくれた。しかしその戦力

は地球と比べれば一と千の差だ。到底足りない。例えば、この警備がそこまで厚くない5thルナに攻め入るとしても、私含む多くの戦力と、奇襲、情報、我々が勝利するために必要な手全てを使っている。そこまでしてようやく「勝てる」程度だ。」

弁慶の泣き所を突かれたホルストは静かになりシヤアをじつと見た。次に言う言葉は聞きたくは無かったのだが、それでも黙って総帥の決定を待つ。

「この作戦、失敗はできない。「完膚なきまでに勝つ」いいな、ホルスト」

総帥と参謀、正論と虚像、指導者と信者、元々が勝てる話ではなかったのだ。もうすっかりとホルスト・ハーネスは静かになってしまった。

そして、その様を横から見ていたナナイが最後に意を告げたのだが、それは彼女らしい保障と補填にまみれた上等な妥協案だった。

「……ギユネイ……ギユネイ・ガスを付けます。それだけは譲れません、総帥」

……シヤアは微笑む。その様子は、まるで愚かな罪人たちを優しく闇に誘うハーメルンの角笛吹きのように。

「5thルナの占拠及び掌握、ほぼ完了との事です。」

ネオ・ジオン、ニュータイプ研究所の長ナナイ・ミゲルは言葉を紡ぐ。

彼女の目的は、驚くなかれ、地球と宇宙ほぼ全ての戦力と自分たち田舎小惑星の戦争だ。

……そしてそれは誰が見ても敗北は明らかだろう。

まともな思考回路の人間ならば銃を捨て裸足で逃げだしている。

いや、そもそも反抗すらないか。並の人間ならそれに犬の様に足を舐めるだけである。

しかしそれを可能にする力が現れた。

彼女は、いや、かつての公国軍の民は、この力を、彼を、待ち焦がれていた。

……かつて、ジオン公国と名乗るスペースコロニー一帯があった。世紀のカリスマ、偉人ジオン・ズム・ダイクンが提唱した人類の次のステージ。

「ニュータイプ」

それは、宇宙に進出した人間は新たな才能に目覚める。という「願い」

言ってしまうえば、半場は無理やり地球から追い出された貧困層、いや、宇宙に人が住めるのかという実験に使われたモルモット達が自分を救うための言葉。

「宇宙に行けば、自分たちを見捨てた人間達を超えた人間に、ニュータイプになれる」

それは、宗教染みた「願い」だった。

「何時かニュータイプになれたら人と人は心の底から解りあえる」

それは、人類の心の底にある純粋な「思い」だった。

けれども、それはジオン・ズム・ダイクンが毒により、その瞼を閉じた時に、ただの私欲を満たす「願望」へと下がり下がった。

人口を減らすための戦争と呼ばれた「一年戦争」

敵を憎み、宇宙全てまで憎悪をまき散らした「グリプス戦役」

内から臓物を食らう様な痛みと悲しみしか生まなかった「ネオ・ジオン抗争」

……その言葉は、幾数もの、幾千もの争いを生み出した。

人類の進化は、ずっとまだ、まだまだまだまだまだまだまだまだまだまだまだ我ら人類には早すぎたのである。

人はその何千ともいう戦いの中で、本来のニュータイプの意味である「人と人が解りあえる力」という言葉すらも理解できず、その進化した能力を、誰よりも「人を殺す力」を持った人間と歪める事しかできなかつた。

最悪だった。

いくら戦争という痛みを地球に教え続けても、地球はそれをすぐに忘れ、宇宙は何度も痛いと呼び続けるだけで報われず傷は広がるばかり。

……そんな腐った世界は「変化」を求めていた。

ジオン・ズム・ダイクンのたった一人の遺志を継ぐもの、キャスバル・レム・ダイクン。

世界は、その「シャア・アズナブル」に引き金を弾かせた。

「……そうか、案外、楽なものだった」

シャア・アズナブルはまるで、つまらないものでも見たかのように一息と共に笑い、ナナイにそう語り掛けた。

「みんな、期待してるんですよ、シャア・アズナブルが、キャスバルが世界をひっくり返す……って」

そしてナナイ・ミゲルもまるで呆れた笑いでも誘うかのように、くすりと笑った。

だが、自分もその一人だと、その大衆の一部だと理解している彼女は、きつとそんな自分を含めて笑ったのだろう。

そして、その笑みは破滅と自虐をひっくりくるめた怪しさ光る大人の顔であった。

「はは、君のそんな顔が見れて嬉しいよ、それだけでも、この行動に価値があった」

「お上手ですね大佐……いえ、今は総帥と、お呼びするべきでしたか？」

そんな女が今は自分の心を埋めてくれている優越感を心に掛けたネオ・ジオン総帥シャア・アズナブルはその大人のジョークを鼻で優しく笑い、自身もまたその大人の一つであると実感して答える。

「ナナイが好きな方でいいさ、君の判断はいつも正しい」

「なら……キャスバルと呼んでも？」

少し、相手の様子を見て話すナナイ・ミゲルに軽い笑いが心に差すが、顔には出さなかった。

シャア・アズナブルには、彼の心の中には自分が引き継いだ組織、このナナイが属するネオ・ジオンも、そして今しがた掌握した5thルナも、スウィート・ウオーターというコロニーや自分を信じる数多の民にすらも興味がない。

言い過ぎてしまえばこのナナイにも興味がない。

自分が本当に愛した女、ララア・スンは死んだ。もう、この世にはいない。会えない。出会う事も無い。

そして今の自分に残っている感情はそのララアを殺したアムロ・レイとの決着。

もう彼に残った、意志らしい物はそれしかなかった。

「アムロ・レイを倒さなければ自分は前に進めない」

その、鎖に、永遠の輪に、シャア・アズナブルは囚われていた。

「構わないさ、好きに呼んでくれ」

心の中の薄い笑いを閉じ込めるように更に笑ったような顔で押しつぶす。

救世主シャア・アズナブルは乾いた様に笑う。

罪

教えて欲しい事がある。この世界の責は、罪は一体誰に在るのだろうか。

……機動戦士ガンダムの世界、宇宙世紀は私の所より人口が何十倍と膨れ上がった世界だ。

度重なる人口爆発に耐え切れなくなった地球は何時しか限りある者たちだけの土地となり、そして人の住処は否定と不安を孕みながらも宇宙まで広がった。

だけれども、裕福な者を地球に、そして弱い者だけを宇宙に押し込んだ結果、地球と宇宙との確執が生まれる。

更に地球は宇宙の拠点、コロニーに対して杜撰な政治しかせず、抑圧された民たちは何時しか団結し、連邦はジオン公国の設立を許してしまった。

そしてこれから先数百年憎しみの連鎖が起こるわけだが……さて、ここで問題だ。この状況、この世界の責は誰に在るのだろうか。

やはり地球か？ それともコロニーを好き放題にした政治家？

言い過ぎてジオンを抛り所にした貧しい人々？

……違う。

全部だ。全てが、腐った地球側も、怒りの矛先を自らと同じ人に擦り付けた宇宙も、つまり私達人間が悪い。

……ならばまずは、一番腐っている地球から人間を排除して、強制的に皆を貧しさを知る宇宙側にしてしまおう。

……これですべてが平等だ。

「……うーん、超大雑把にシャア・アズナブルの話もほんの少しは解るんだよなあ……」

ぷかぷかと、ちよつと前まで牢獄の様に扱っていたケーラ・スウの部屋で私は凶々しくもファスナー付きベットの上に転がりこれからの立ち回りを考えていた。

……話を戻そう。シャア・アズナブルの理想と言うのはひと先ずは全人類を宇宙に昇らせることだ。

「ただ、そのために死んじやう人が多すぎて、話が宇宙側から見た都合過ぎて、賛同は絶対に出来ないなあ……」

服はしっかりと着て、部屋に転がっていた何故だか使い方を知っている端末に、これまた何故だか知っているコードを受け口に刺して、またまた何故だか読めてしまう文字を読み、ごろごろと情報収集をしていた。

果たして、こんなにゆっくり動いていいのだろうか？ ふと自分ですら疑問に思う。

「でもこんな話を支持する人が多くいる程、地球に不満を持つてる人がいるのかあ……」

同じ人間同士が互いを不幸になってほしいと思いたいあう世界、それは非常に悲しい事で、あつてはいけない事だ。政治や勉強に疎い私でもそのくらいは考える。

「私はシャア・アズナブルの主張は理解できないなあ」

……その結論は自分が裕福な者だから出来るとても幸せな考え方だと、私は後になって気付いたのだった。

……一区切りついて自分の置かれた状況の話に戻ってくる。ひとまずの謎はこうだ。

この世界はガンダムの、宇宙世紀の物語、私は何故この世界に割り込まされたのか？

そして私は恐らくケーラ・スウという存在を、言うなれば「上書き」したかのようにこの世界に現れた謎の物体。一体何がどうなっているのか他の人には元のケーラに見えて、認識されている。それはいいとしてそもそも元のケーラさんはどうなったのか？

アニメの世界に入った事は一番の突っ込みどころだけど、たぶん私の世界のプログラムされた新体感ゲームなどではない事は確かだ。それは私の世界では到底実現不可能なMSという物を間近で見て触ったのだから言える。

「……むしろゲームだったら死んじやっても現実に戻れるからいいのかな？」

溜息をまた吐いて、この話は一時置いておく。今はこの世界を現実

と捉えて一生懸命生きるのが確かだと私はそう感じた。

話を戻そう、そして私と同じくらい謎な物体が一つある。

「……何だろう。この金属の……切れ端？」

そして一番謎な言葉をしゃべる金属の切れ端、今は喋らないが、あの時助言をしてくれたので一応の味方と思う事にはしておこう。

「サイコフレーム……だよ、チェーンさんが持ってた」

伝説のエース、アムロ・レイが最後に思いを馳せた恋人チェーン・アギ。私の手の中にあるそれは、そのチェーンさんが持っていた試作のサイコフレームの切れ端に寸分の違いもない。

このサイコフレームが登場するのは物語の中盤頃だし今現在、この船には存在しないものだ。最後にみんなの想いを乗せて隕石を押し返したこの逆シャアのキーアイテムでもある。

「なんでこんなものが今私の手にあるのだろう。」

……考える事が多すぎる。とりあえず悪いものではないみたいだしこのサイコフレームは携帯しておく事にしよう。

今できる結論をまとめて私は寝そべりあの声を思い出す。

「アムロ・レイ……カッコいい声だったなあ……」

思い出したはいいが、先ほどその人の初対面が最悪だったことに気付き頭を抱え、瞬時に頭の中の話題を変える。コロコロコロコロ話題を変えてまるで私は坂から転げ落ちるおにぎりの様だ。

「……フアスナーが付いているベット……か。私のところに居た時はまさかこういったものに寝そべるとはおもってなかったなあ」

結局、他の所に気を取られる。が、それは悪くない兆候だった。

無重力下で寝る場合はどうしても普通のベットだと、航海の途中により布団や体があちらこちらに漂ってしまうために、こういう風に掛布団とベットが一体化して掛ける方の真ん中にフアスナーが付いている。ごちゃごちゃして使いにくそうという感想を持つ人も居るだろうが、こういったものは地味に命綱なのだ。

宇宙において、捕まるものがない状態で躓きでもしたらそれは惨事なのだ。偶々運悪く誰も居ないMSデッキで体勢を崩し、ぐるぐると脳に血が周って気絶、そのまま無様に死ぬまで踊り続けたりした恐ろ

しい事件もある。なのでこういう物は野暮つたいからと言っても決して馬鹿にしてはいけないのだ。

(……アストナージさんはこういう豆知識も交えて心配しつつ私の興味を引いて教えてくれる。やっぱり良い人だ)

(この世界の人々は私達と変わらない、暖かい人たちだ。私はその人たちの悲しい顔を、血を吐く様を見たくない)

「……だから、私は……ケーラ・スウに、この世界の一員になって……いいのかな？」

……そう悩んでいる私は、これから起こる事の重大な未来に目を向けようとする。この世界を舐め切っていたのだ。自分の命一つで済むのならラーカイラムの船員の為犠牲にもなろう。と、その「程度」しか考えていなかったのである。

……これから起こる、5thをめぐる戦いにすら目を向けずに。

明日

「5thが動き出したって……本当ですか!？」

私は先ほどモニターに回ってきた、余りにも早すぎる事実をわざわざ、ラー・カイラムのクルーに問いかける。焦っていた、失念していた、油断していた、もう少しシヤア・アズナブルが動くには時間があるだろうと、勝手に思っていたのだ。

(そんな……、まだ私がここに來てから数日もたっていないのに……! もう!?)

5thルナ奪取から始まる本格的な戦争。これからこの艦は激戦を繰り返し、当然休む暇は全くない。一息の休息时间すら惜しい時もあるほどの怒涛の流れに身を任せる事になる。それを私は無駄に時間を使ってばかりで……。

事になってから滝の様に襲ってくる後悔に私は、自分がわからなくなっていた。

そして、誰だか解らない初対面のはずのクルーは私を見て親しそうにこう告げる。

「ああ、そうらしいな。艦長は地球を狙ってる可能性もあってる、その時は頼むよ」

「ケーラ」

……私はその言葉にまたも背筋が凍り付いた。

私のこれから先の行動に、自分の命一つ以上の大きな物が肩に垂れ下がっていることを再認識させられたからだ。

それは今話しかけているこの人の命も同じなのだ。それはパイロットとしての当たり前の重圧だったが、戦いを経験したことのない私は底から震えだす。

「……あの、私も、戦うんですか?」

……何を言っているのだろう、私は。思わず当たり前のことを目の前の人にぶちまけた。

「……は?」

当然、口を開けて、クルーは「ケーラ・スウ」を見る。

……そして軽く冗談めかしてこう言った。

「何言ってる、ケーラ。君達が居ないと俺たちはすぐ死んじゃうぜ？」
……そうなのだ、勘違いだったのだ。私はこの人たちに守られて、その結果死ぬわけではない。

私はこの人たちを脅威から「守って」やらねばならないのだ。命のやり取りを、私自身がして自分の手でこの人を守って敵と「戦う」のだ。殺し合うのだ。

さつきまでの私は、あくまで戦闘のプロたちに守ってもらおうというお客様の気持ちだったがそれは違う、私は当事者なのだ。引き金を引く者なのだ。自分に経験が無いなどと言ってられないのだ。そんな言い訳、使い物にならないのだ。

自分の置かれている状況に、今、初めて面と向かったという事実には私は驚き、そして芯の底から震えた。

……様子のおかしい「ケーラ・スウ」を見て、クルーは怪訝な目で見始める。さつきの発言と言い正常なメンタルなのか疑いに思いました。

職業柄、人の死を間近で見るパイロットにありがちなPTSD（心的外傷後ストレス障害）の可能性も否定できない。次第に声は冷静でなくなり、震えるケーラ・スウの肩に手を置こうとする。

そうすると、伸ばす手を見てケーラ・スウは吐く息の音が自分にまで聞こえる程大きくなった。手を置くと肩で呼吸をしている。気が付けば目はあまり定まっても無いように見える。極めつけに下を見れば手は僅かに震えている。

これではまるで戦う準備のできていない民間人の女子供である。新兵ですらない。

……疑いが確信に変わろうとした時だった。

「……よお、どうした。こんなところで」

ある人物が横から声を掛けた。そのケーラ・スウと近しい人物を見てクルーは助かったと心に思う。

「アストナージか、ケーラがちよつと悪いみたいだ。医務室に連れて

行こうと思う、同行してくれ」

「よかったよ、何とかなって」

そう笑いかけるアストナージさんに私は何も言えなかった。心の中は唯々感謝の言葉でいっぱいだったのに何も言えず震えるばかりだった。

……その、痛々しい様子にアストナージはケーラの姿を捉え、抱きしめてしまいそうになる。

だが、自分の見ているケーラ・スウは違うのだと心に言い聞かせ、それを抑えた。内心、好きな女のその様子など普通の男は黙って見てられない。

アストナージ・メドツソは複雑な心境の中、目を背けたくなった。

しかし、そんな事をして今この彼女を傷付けるだけであることは頭の中で解っていた。頭で何とか整理して言葉を慎重に選ぶ。

……彼もまた必死だった。

「大丈夫かい？5thの件を見たら心配になってね」

紡ぎ出した言葉は平凡な物だったが、彼女にとっては暖かい、彼女の望んでいた何時の光景、当たり前のものであったようだ。

「……だいじょうぶじゃ……ないです、よお……！」

……また、恥ずかしい所を見られてしまった。

不安だったのだからしようがないと自分に言い聞かせ、またもアストナージさんに悩みをぶつけてしまう。

これもあれもしょうがないと言っては人は成長できないというのに、私はやはり未熟と言う言葉が当て嵌まっている。

「……なるほどね、要するに君はこの世界のケーラ・スウとして生きて行くかどうか悩んでいる……と」

アストナージさんが話をまとめるときつきよりは大分冷静になった私は頷く。

「……はい。この世界でケーラ・スウになるか、それとも「私」として皆にこれからの困難を伝えていくかどうか……」

「でもそうしたら私はどう立ち回ればいいのか……解らないんです」
「そう考えている内に私が誰なのか、本当にやりたかった事とかも自分で解らなくなってきた……」

また先ほどのクルーのセリフを思い出すとその恐怖の名残が襲ってくる。

自分がどうすればいいのか？なんて他人に聞くときは自分の道を見失った時だというけれど、その場で考えて考えて解らなくなった私は無責任にもアストナージさんに舵を託した。

「自分の好きな方でいいんじゃないの？」

「……は？」

アストナージさんがまるでふぎけて言ったかのような言葉に、私は思わず呆気にとられる。

だけれど決して何も考えずの無鉄砲でない事は次の言葉で証明された。

「いや、さ。人間何やっても後悔と言うし、進めど後悔、戻れど後悔だったら、いつそ自分の好きな風に生きればいい」

「他の皆はどう考えてるのは知らないけどさ、いつ死ぬか解らない俺は、そう思つて艦に乗ってるよ」

「ネオ・ジオン抗争時の、生意気なパイロットから教えてもらった考え方だけだね」

「……それって」

誰がアストナージさんにその言葉を教えたのか解つた時、私は微笑んだ。彼らしい、明日を見据えた眩しいセリフだったからだ。

ガンダムのパイロットと言うものは何時も、そんな平和で暖かな、みんなが笑いあえる、そんな日が来る時を願つて戦つてきたのかもしれない。と、思つたら自然と笑みが零れてしまったのだった。

「だから僕も、好きなようにやらせてもらう」

「……え？」

「……アストナージさん……本気ですか……！」

飄々と前へ進むアストナージさんに私は苦い顔をして、必死に止める。

これから先この人がしようとしている事はとても難所というか、恐れ多いというか、そういったとてもハイリスクハイリターンな行動だったからだ。

「ああ、アムロ大尉に君のことを話してみる」

……それは、あまりにも思い切った決断だった。

「でも……！」

私の制止を振り切りアストナージさんは続ける。

「聞いた限り、大尉は何か君の事を掴んでいる。それに、これから先、君は僕に頼りっきりのつもりか？」

そう言われてしまうと黙るしかない、解っているのだ、アストナージさんは。この世界においては、味方が自分一人だけでは絶対に生き残れないのだと。

……メカニツクマンのアストナージさんはパイロットであるの私の本当に困難な時、敵と殺し合う時に傍に居ないのだと。……自分は私の支えにはなれないと。

「安心して、大尉だって、君を取って食ったりはしない。大人の人だよ」

確かにもしアムロ・レイが私を手助けしてくれるのなら、間違いなくこれからの困難に対する最大の切り札になるだろう。

だがしかし、ほんの少しでも間違ってしまうえば、今のケーラ・スウとの関係が決裂してしまえば、きつと、最大にして最後の難所「アクシズ落とし」どころかこの物語の最序盤「5th攻戦」ですら根元から崩壊してしまう危険性を秘めている。まさに諸刃の剣であることは明白だ。

アストナージさんは少し急ぎ過ぎなよう気もする。必死に止めるべきなのだろうか？

「……あのっ!!」

……そう思ってしまったたらすぐ声に出してしまった。大きな声を出してしまった私に驚くアストナージさんに、出してしまっ

込みがつかなくて少し興奮気味になった私は話を続ける。

「アストナージさん、急ぎ過ぎじゃないですか……？　この戦いが終わった後でも……！」

そう、これから起こる逆襲のシヤア最序盤の5th攻戦、この戦いではケーラ・スウは恐らくは出撃しているだろうが、そのケーラが絶対に倒せないほどの力量差のギユネイ・ガスそしてシヤア・アズナブルとは物語通りであれば刃は交えないのだ。

つまり、この百戦錬磨の強敵と戦う機会が無いというのは、ゲームで例えるのならボスのいない1stステージ。私が戦いになれるのは絶好の機会なのだ。

だからもう少ししばかし慎重に、せめてこの戦いぐらいは安全に「逆襲のシヤア」のシナリオを進めてもいいのではないかと言う問いだった。

「……急ぎすぎだったって？」

しかしこの時、アストナージ・メドツソは珍しく自分の意思を通した。

「急ぎすぎにもなるさ……!!　……僕は君に何もできないんだよ……!!」

……心配など、もう超えていた。アストナージは気が気でない位に、今にもアムロ・レイの下まで走り出す気を何とか抑えているくらいに焦燥していた。

ただの仲間の冗談にすら、あのようには震える彼女を見てアストナージが何を思ったか、想像するのは容易である。

自分の大切な人が戦ってるのに自分はその準備を整えて、送り出す事しかできない。愛しい人が死線を超えない事をただひたすら祈って待つ。これが何と空しく情けなく思う事か、よく思い知らされていた。

「……ごめん。大きな声を出した。」

だがそれを押しとどめる。彼女を困らせても意味などない。だが、ここでアムロ・レイを頼る事は案外間違いではないような気持ちにはあった。

「でも、ここは焦ってもいいと思うんだ。」

何故ならばとアストナーは一言置き理想の絵巻を語った。

「ここであまくやれば、5thを止める事も、シヤアを倒すこともできるかもしれないんだろ？」

「……あ」

確かに、戦いの練習だ何だと言わずに今、ここで何とかすればその後の悲しみも起こらず、後は私がどうやって元の場所に帰るのかゆっくり考えればいいだけである。

だけど成功はするのだろうか？ アムロ・レイに伝えれば、彼は全てを受け入れ、シヤアを倒してくれるのだろうか？

「……ここで上手くやろう。ここで、全て終わらせてしまおうよ、ケラ」

ケラ・スウ。それが「今」の私の名前、当たり前のようにアストナージさんが零してしまったその言葉に私は緊張を感じるでもなく、たつた今ようやく見つけた希望と思わしきものに手を伸ばすことに悩んでいた。

この時の私は、ケラ・スウと言う名前を剥ぐことに、元の彼女は自分の役割が終わればまた現れて「欲しい」とそんな幻想に囚われていたのかもしれない。

「……ブライト、5thの追跡はどうなっている」

アムロは少し急かしたかのようブライト・ノアに語り掛ける。

アムロ・レイにしては少し毛立った言葉にブライトは悲しみを抱いた。何時しかの様を思い出したからだ。

シヤア・アズナブル、いや敵の事を考えて、それ一つの事しか考えなくなる癖。

この癖は、先ほどの若いころの青い尻とはまた違って、パイロットとしては仕様がなない事で、これが無ければパイロットと言う職業に適性が無い……と、言っても過言ではない誰もが小なり大なり持っているプライドの一つだった。

……プライド。

それは若い頃は勢いになって力となり周囲は微笑むが、年を取り、守るものが増えると、周りはそれを決して微笑んでは見られなくなる。

なぜならば、人は年を取るほどその背中に他人の運命を背負うからだ。

「……焦っても何も無いよ、アムロ。今は休んでおけ」

後の伝説のエースパイロット、アムロ・レイが背負っている人々は、一体どれほどいるのだろうか、彼の身体はもう、一人の枠を超えている。その事を解らない彼ではないと承知しているが、やはり心配になる。

どこからか確信があるのだ。

アムロ・レイはどのような苦境にあっても、命を懸けてシヤア・アズナブルの全てを奪うだろう。

例え両手両足が潰れて無くなっても腹で動き、残った口でその喉元を噛み千切るだろう。

……そんな息の詰まる様な確信が。

使途

……重い空気の最中、緊急時にはロックがかかり隔壁となる厚い壁が開いた。

「アストナージじゃないの……、なぜここまで？」

後ろに居る私は少しでも今の状況を冷静にとらえるために少しつま先を立てさせ、アストナージさんの肩の上から恐るおそるその声の主を見る。ブライト・ノアだ。あの画面の中の艦長だ。

少し前は一人で勝手に焦って碌に見れなかった艦長の目を遠くから見る。だが、彼もまた必ずしも味方になるとは限らないという事を考えるとせつかくの夢の様な光景も曇った。

「いやね、艦長。大尉に話があつてね。ちよつとでも早く意見が聞きたくて……さ」

「……MSデツキに呼ばばいいじゃない、パイロットなら」

私なら絶対に口ごもる艦長の言葉をアストナージさんは言い慣れているようにすらりすらりと紡いだ。

「いやね、リガズイ頭部センサーの仕様変更確認なわけ」

「古いと思つてたセンサー類の中に良いものが混じつててね、少し精度が良い物になつたんですよ、そこで大尉には用があつて」

(……そんなの勝手にやつとけつて思うだろ？でもそうはいかない訳さ、パイロットは命を賭ける職業、勝手に自分の命の綱のMSを変えられて死に行けない、絶対に数分時間が取れるのさ)

先ほどのアストナージさんの言葉が頭を過ぎる。その言葉を私は欠片も疑つていなかったが、ブライト艦長の瞳がアストナージさんを見て、そして流れる様に私を見た時に少し心臓が動く。

「……後ろのケーラは？」

「同じ件で同じ話」

話しているのはアストナージさんのはずなのに、思わずブライト艦長の視線から目を下に逸らす。そうするとアストナージさんの背中が目に映る。

自分の信頼している艦長に自ら盾となって前に立ち、その大切な人

を裏切るような真似をしてまで私を庇う姿を見て、今私を守ってくれているその背中が如何に心強く、そしてどれだけ私の事を思ってくれているのかようやく理解する。

そう、アストナージさんの背中が語るのはただひたすらにケーラさんを包む愛情だったのだ。

……こんな当たり前の事にも気付かない私は、やはり馬鹿だ。

「問訪うするほどの事じゃないさブライト、了解した」

「……アムロ……レイ……！」

少し笑ってこちらへ向かってくる伝説のパイロットを見て心の臓が高鳴る。

幾戦の戦場を走り回った足、マメが潰れて、潰れて固くなった勇ましい手、その目は幾つの死を見てきたのだろう。

その人物がずんと、私とアストナージさんの目前に立つ。

……そして小さく、私達にだけ聞こえる声でこう言った。

「……アストナージ、ケーラの事だろうか？」

「……はは、ニュータイプってやつかい？」

流石にアストナージさんの皮肉も冴えない。

「……違うよ。MSデツキでは人が多い、そしてここいらは小さい部屋が多いはずだ。聞かれない話に、隣にケーラ・スウ。……誰でもわかる推理さ」

背筋が凍らされる思い等はもう味わいたくなかったが、一体ここに来て何度経験すればいいのだろうか。

アムロさんは私達の望む場所を嫌な顔一つせず従ってくれた。

……これは勝手な妄想だが、やはりアムロさんはケーラ・スウに関して何か引つかかる物があつたのかもしれない。私の不用意な行動をただ怪しく思って声を掛けたとは、こと彼に取ってはあまり考えにくいと先ほどの用心深さで感じたからだ。

ただ流石に「人が丸ごと変わっている」と言う結論には恐らく辿り着いていない。私の話を聞いて十分拒否する可能性もあり得る。

「……大尉、あえて聞きます。彼女はケーラですか？」

「……アストナージ、秘密を話す事は協力を仰ぐ時だ。……そのつもりで聞く」

……信じてもらえるかは解らない。が、確実にアムロさんは私を、ケーラ・スウの何かが違うと思っている。アストナージさんが事の骨組みを話し、私が経験したおおよそを肉付けして話す。

希望と言う光をこの手に掴む為に私は藁にも縋る思いだった。……たとえそれが息が出来ず溺れている真ただ中であっても。

……

……

……

……

「……そうか」

アムロさんが一息吸って。

「……馬鹿みたいな話……とは思わなかったのかアストナージ？」

……全てを話し終え、アムロさんがそう切り出すと私は緊張と不安で溢れそうな涙をぐつとこらえる。

仕方がない。仕方が無いのだ。こんな話、誰も信じてもらえる訳が無いのだ。

そんなアムロさんの不意の一言で私の心は揺さぶられた。

表情では解らない。が、その言葉はとても絶望的な言葉だ。最悪なまでに。……だが、それは今の私にはまったく届いていない。ただ胸にあったのはその言葉に対しての……どうしようもない理不尽な怒りだった。

「馬鹿みたいな話とは思わなかったのかアストナージ？」

……この人から見た私は余程の馬鹿にみえるだろう。さぞ、くだらない話だろう。

……でも、でもアストナージさんは信じてくれたのだ。私の、こんな馬鹿みたいな話を一生懸命に、大真面目に。私の僅かな仕草で気付

いて、何も言わず黙ってうなずいて、守ろうとしてくれて……。

ブライト艦長にも嘘ついて、必死に庇ってくれて……危険な橋も一緒に渡ろうと言ってくれて……!!

「……あの、……そんな言い方は無いんじゃないですか……?」

……不用意な小さい言葉が漏れる。

アムロさんはその言葉を聞いて、何も言わずじつと私を見つめた。

アストナージさんが慌てて止める中、私は続ける。

「私の事は信じてもらえなくていいです……でも! ……アストナージさんを……馬鹿にするような言い方……ないじゃないですか……!」

もちろん後先なんて何も考えてはいなかった。ただアムロさんの、アムロ・レイの言葉でも許せない言葉はあった。

私の事を真剣に考えてくれる人の悪い言葉は例えこの人でも……許せなかった。

……そんな自分の想いを伝えたらかなり体が熱くなっていたことに気付く。

「そこだけ訂正……、です……」

短く話し終えたら急に冷静になって……静かになる。自分がやったことに嫌悪感が湧き、怒りの出汁にしたアストナージさんに申し訳ない気持ちでいっぱいになる。

「見た目は一緒に見えるけど実は別の世界から来ました信じてください」

……ネオ・ジオンの件もあって、空気がひりつく中に突然呼び出されてこんな話をされて、都合の良い答えが返ってくるはずがない。アムロさんにすら理不尽な怒りをぶつけてしまった。

……アムロさんの当然といえる反応に勝手に逆上した私の気分は後悔だらけの最悪だった。

「……大尉」

アストナージさんがそう静かにアムロさんの方を見る。

その顔はあまり良い印象とは言えない様だ。じつとこちらを注意深く伺っている。

それを救いを求める様な顔をしてじっと見つめる私にアムロさんは単刀直入にこう言った。

「……ララア・スンは何を言っていた？」

私は驚き目を大きく開いてアムロさんの方を見る。やはりアストナージさんに出会う時に聞いたあの暖かい声は……。

心のどこかで合点していた。優しい声はあの人だと。……そしてこのアムロさんの一言で淡い希望と同時に考えたくもない恐らく一つの結論が頭に浮かぶ。

この答えに辿り着く前に一つ知って置いて欲しい事が在る。機動戦士ガンダムの世界の特徴として、とてつもなく進歩した機械技術がある。そして同時に、その非常に高い技術を持ってしても測れない強い力が存在する。……アストナージさんがアムロさん呼び出す時に小さく言ったあのセリフ。

「ニュータイプ」

生前は勿論、死後にも残るその力。ジオン・ズム・ダイクンが提唱した新たな人間の力。それは世界を破壊にも再生にも導く碧い炎。

……そしてその力の持ち主の一人。アムロ・レイは私の方を見て語る。だけど今、その名前は……。

「ララア・スンは何を言っていた？」

「僕は君がケーラでは無いと信じる……と、云うより信じるしかない。君の騒ぎがあったというあの日、歪なとても強い力を感じた」

その言い方はまるで……。

「もう一度聞くと、ララアは、彼女は何を？」

心のどこかにしまっていた結論が表に出た。じゃあこの世界に私を呼んだのは……、この世界に来た時に聞いたあの優しい声は……全部。

「……ララア・スン……？」

幸せ

「あの違和感……覚えたくは無いな」

先ほどあった、事の一件から自室。ぐしやぐしやになった心を掛ける様に壁にもたれかかったアムロはある予感を感じていた。

……その予感を、アムロが抱くことは必然だった。

シヤア・アズナブルが本格的に動きだしてしまった今と、ある日の強大な力の感覚。そして先ほどのケーラ・スウ。抱いたのは、恐らくこの三つは「彼女」で繋がっているのではないかと言う疑問。

……静かに目を瞑る。

……あの悪夢の様な現実を、何時からか見なくなった。

明確な理由などは解らない。だが、それはきつと、きつと今の自分は「ここ」に居る事に満足しているからだ。微塵も寂しさを感じさせない仲間達や、チェーン・アギの存在。今生きる自分の人生の使命。それを感じていたからだ。

……そう思っていた。

……そして、何時しかシヤア・アズナブルの陰謀を知り、自分も是非にと加わった。そうすれば自分は自分に納得できる。……そうだ。

——アノヒヲノリコエタノダト、ジブンニナツトクデキルノダ。

……思わず手に力が入る。

「……それで、……それで！ 奴と決着して楽になろうとしていた俺を笑いに来たのか!? ……ララア・スン!!」

……アムロと少し離れて「そこ」に確かに彼女は居た。後悔し、懺悔もできなかつた最低だらけの小さい、小さいあの日の自分に戻った頃の様に。だが、それは今のアムロにとって全く好ましくない事だった。

……目線も合わせることなく、先ほどから変わらない、片腕を壁に押し付けた姿勢でアムロ・レイはララアを否定した。

「何を考えている、ララア！ ……赤の他人すらも巻き込んで笑っているのか…!!」

そう、アムロが叫ぶとララア・スンはあの日から何一つ変わっていない花の様な笑顔でアムロを優しく見つめる。その顔はとても純真無垢で吸い込まれそうと比喻しても可笑しくない程の不思議な魔力が込められていた。

「答える!! ララア!!」

ようやく目を見開いたアムロ・レイは、怒りを隠せないでいた。

何故ならケーラ・スウとなっていた彼女は言った、「アストナージに謝れ」と。

話を信じるならば彼女は戦争など無い平和な国で育った唯の小さな少女だ。その少女に謝れと言われた時、本当に彼女は闘争が無い世界から来たのかと問いたくなくなった。なぜなら彼女は強かったからだ。突如自分の居場所が無い、金の価値すら分別出来ない世界に来て、自分だったらと思わない訳が無いだろう。

話では触れていなかったが彼女が経験した、突然知らない暗い部屋で叫び声をあげてドアを叩かれることの何が恐ろしいか。

突然、見知らぬ命を守れと知らぬ者に心から信用される何が恐怖か。

戦争の中に巻き込まれ、人殺しを強要される重圧と言うものは手が震えて眠れぬ日々が続く。

夢に出て、一生その死が離れず…そして身近な死を見てこう思うのだ「次は自分の番かも知れない」…と、その何が自分を追い詰めるのか。

その辛さをアムロ・レイは総じて知っている。…そして彼女はそれを知って尚、アストナージを守ったのだ。

そんな余裕などない事は顔を見れば丸わかりだ。今にも泣き出しそうで、震えていて、他人の顔色一つで如何様にも変わる力のない追い詰められた顔。そんな不安でいっぱい顔。

そこまで崖っぷち状態で、誰かを守る人間は間違はなく、他ではない真の「強さ」を持ち合わせているのだ。

「あの子に戦争など……教えてはいけないんだ!! あの少女に勉学や恋をさせてやるのが……俺たちのやるべきことだろうに……!!」

……ララア・スンは何一つ変わらない表情でこちらを見ている。

「君は……! なぜ彼女を呼んだ……!! ……あれではまるで輝^{ひび}が入った飴細工だ!!」

「……簡単に壊れるぞ……!」

鬼もすらも怯ませることが出来るだろう刃の様な眼光で目の前の悪夢を睨む。

ララア・スン。彼女もまた年端もゆかぬまま散った命の一つだ。

少女らしく恋焦がれ、女らしく振舞い、そして戦士として愛する人に最後まで殉じた。そんな彼女だからこそ、あのケーラ・スウを呼んだ事をアムロはより一層許せなかった。

最後の最後にシャア・アズナブルを思い散っていった彼女だからこそ、別視点から戦争を自分以上に知っている彼女だからこそ、せめて戦争を知らない幸せな少女には、幸せなままでもいいのだと自分たちは告げる立場ではないのかと、アムロ・レイは心から叫んだ。

「……答える! ララア・スン!!」

そうしてようやく、夢の中の彼女が何か告げようと重い口を開く……。

……。

……。

……途端、目の前が真っ白になりベットから目が覚めた。

……ラー・カイラムの自室。いつ飲んだのか解らない水の入った容器、脱ぎ散らかされそこらを漂っている私服に汗だらけで床から醒めた自分。

……だが、夢だとは毛頭思っではいなかった。無力だった何時かの様に壁を強く殴る。

「また同じ夢を見るようになった……!!」

そうやって絞り切れない程、溜まった膿を吐き出すしかなかった。

……そして、間もなく寝込みをを狙ったような最悪のタイミングに通信端末が開く。

「なんだ……！」

苛立ちを隠せないアムロは、そのままの怒りを込めた言葉遣いで画面越しの相手を睨んだ。

「……ひっ……！」

……寄りにもよつて、守らねばならない彼女だった。未熟な己を心の中で軽く叱りつけ、自分の髪を触り、彼はすぐに謝った。

「……すまない、ケーラ。嫌な夢を見たんだ」

そして今、アムロは「ケーラ」と自然に呼んだがこれは皆の前で別の名で呼ぶことは違和感が生じてしまう為、元の彼女の名前は使わずしばらくはケーラ・スウと言う名前を利用させてもらうというアムロの提案が受け入れられた結果だった。

その画面越しに映る彼女を、ケーラ・スウを守るというアストナージ立つての話に軍人としてアムロ・レイは勿論、協力した。

そのケーラが怯える声を上書きして、ふと違和感を感じる。

「……い、いえ、でももしかして夢って……」

「……？ 何か知っているのか？」

アムロは知リたかった、今に繋がる事はとても興味深い。……この話は見逃せない。このあて嵌め方は好きではないが、あえて言うならニュータイプの勘という奴だった。

「ララア……さんの……の？」

「……物語では違うのか？」

思わず答えを急かしてしまう。

「……はい、……違うんです。アムロさんがララアの夢を見るのは……5thが地球に落ちて……レガンダムが納入された後で……」

「……そうか、5thは地球に落ち、俺たちはそれを止められないんだな」

……重い予言だった。それはすぐにでもブライトに知らせたい情報だったが、今の彼女の話すべて信じる、信用するという事は軽率には出来なかった。逸る気持ちもあった。だが、それを静められない程アムロ・レイは子供ではなかった。

「……あ」

ケーラ・スウが如何にも口が滑ってしまったといったふうには黙る。別に気にする必要は無かったがアムロはあえての一言を口にした。「……いや、いいよ。そしてすまないが僕は信用したい。が……」

「その言葉を真に受ける事は出来ない」この状況、下手に回りくどく伝えるよりも直接自分の想いを伝えるのが一番だ。何故ならアムロ・レイは知っている。強い人間と言うのは周りの事を一番に考えられる人の事だ、そして思案するときには自分の身一つすらも他人として扱える者の事だ。

「知っています」

ケーラ・スウは即答だった。承知していたのだ。今の自分に信用される程の実績は皆無であるという事を。

「……すみません、アムロさんに辛い言葉言われたらショックだったので、途中で遮っちゃいました」

……そう自分に笑いかける彼女に、アムロ・レイもふと一つ笑い、先ほどの不機嫌を厚手の布巾で拭い去る様な顔をした。彼女ならば、きつと明るい未来が開ける。今のケーラ・スウは彼女では無いし、馬骨である未来の言葉も心に掛ける事は無い。

だが、しかし。アストナージが身を挺して守った彼女なら、この絶望ばかりの世界に迷い込んだ意外と芯の強い小さな客人の言葉なら、自分の様なニュータイプの子言などよりも俄然説得力がある。そう思えた。

「直接話そう、アストナージも居るんだろう？」

「話し過ぎですよお、大尉」

忘れ去られたお調子者のアストナージ・メドツソを入れて三人で軽く笑った。

牙

……私はなんと弱い人間だろう。

小さいころの、一人ぼっちの私は我儘を言っては聞かない子だった。

人に無理難題を言つて、無視をされては泣いて……。

そうしている事で誰かが私を見てくれる事を期待したのだろう。結局、幼稚園の先生に強く注意されてしよげた弱い私はその情けない行為を捨てる事にした。

そんな、馬鹿な私に友達が出来た、誰かに頼り切りの小さく馬鹿な弱い私を守ってくれる親切な友達、初めての友だった、大切な大切な私の友達、そんな誰しにもありふれている存在が幸運にも居た。……居てくれていた。

その友達はなぜか私みたいなのを気に入ってくれたらしく、いつも一緒に居てくれた。「小さいころと性格変わったな」と揶揄いに来た同級生も跳ね飛ばしてくれる。凄い、憧れの友だった。

その友は、自分の友達も紹介してくれて、何時しか私の周りにはいい人たちが集まった。

いい人たちは馬鹿な私にも優しくくて、……とても優しくくて、ひとりぼっちだった頃の弱い私はもう居ないんだと、もう寂しい思いはしなくて済むのだと、……そう勘違いをしていた。

……目を瞑るとしばらくの暗転、ああまたこの夢かと何となく頭の隅に写ったが、決壊したダムの水流の様に、もう私には止められない。全てをどす黒い渦が飲み込んでいく。

……しばらくの闇の後、その大事な友達がしゃがんで泣いているのが見える、泣くには悲しみと嬉しい時と痛い時が主だが、よく見るとその友達はどうやら頭から血を流しているので痛くて泣いているらしい。

どくどくと押さえている手から溢れていく鮮血を私はじつと見つめている。いったい今の私はどんな顔をしているのだろうか？

……知っているのに、私はその光景を知っているのに息が荒くな

る、肺がいくら酸素を吸つても膨らみ、止まらない。……苦しい、目の前が暗くなつていく。足が宙に浮いていく感覚がする。

息苦しくて、息苦しくて、どうしようもなくなつた私は友とは逆の方を向き走り出す。……そう、私は逃げ出したのだ。

熱くなつた走る背中に微かに、だけでも確かにする纏わりつくような声が耳から離れない。それが逃れられない夜の闇の様に私を包む。

「……痛い、痛い……」

そして友は確かにこう言ったのだ。

「……たすけて……」

……これは小さい、なんとも小さい裏切りの記憶だ。

「……思い出しちゃった、……何で逃げたんだろ……」

ケーラさんの部屋、少しだけ私の匂いがするようになった。ベットで体育座り、いつもより胸を足に近づけて、抱くように辺りを見渡す。

さつき私が使った飲み物の容器がこの部屋のケーラさんの匂いを消している。……僅かな違い。だが、こうやって少しずつケーラさんだった痕跡も、証拠も、存在も消えていく。私が少しずつ塗りつぶしていく。

こんな私などに、塗りつぶされていく、何も罪もない人が、消えていく。

「……もう、やだ。……帰りたいたい」

アストナージさんは言わずもがな、アムロさんも話を聞いてくれる。ハードな世界に絶望していた私に差した希望の光すらぐしゃぐしゃにしたい衝動に駆られる。

こんな事、思つてはいけない事なのに。……二人を思い出すと、小さい頃のように温かい手を差し伸べてくれたいい人たちの事を思い出してしまうのだ。

頭を軽く左右に振って、私は空をまるで纏わりつく湿気の様に見つむ。手は汗だらけで、なのに体は冷たい。芯まで凍えた息を吐いて私は誰も居ない、私の部屋ですらない場所で今の自分を整理した。

「……もう、誰も裏切りたくない……だから……私は」

……薄暗い中、隣の端末がチカチカと赤く光る。どうやら誰かが私の部屋の前に立っているらしい。

「……アストナージさん、かな。もうそんな時間か……」

モニターの通信も繋げず、先ほど「考えを纏める、悪い話にはしない」と私の馬鹿げた話にも大人の余裕をもって返してくれたアムロさんのいい返事を思い出し、少し気が緩む。

アストナージさんとは、その後時間を見て話しを聞きに行こうと約束したので恐らくその件だ。大丈夫、服はしっかりしているし、今は気も静かだ。きつと何時もの私で喋れる。

そう言えば、ちよつとだけ癩という程でもないが……アムロさんもアストナージさんも私がケーラさんじゃないと伝えると二人とも明らかに「なるほど合点が云った」と顔に文字を書き、その次に大なり小なり笑うのだ。アムロさんは鼻ですこし笑う。アストナージさんは隠しもしない。

アムロさんが笑った後、アストナージさんに聞いたが「今までのケーラと違い過ぎてよく考えればバレバレの簡単な答えだったからだよ」と言った。まったく、私は良いにしてもケーラさんに失礼ではないだろうか？

……でも、それがきつとアムロさんと、そしてアストナージさんとのケーラ・スウさんの絆……という奴だろう。

そう気付いた時私はアムロさんの様に、ふと鼻で笑った。

……絆、何時かの私が失った物。それはケーラさんの場合はきつと、どんなに厳しい状況にいても皆を笑いに誘う程のきらきらと光る透明な丸い宝石の様なものなのだろう。

そんな風にまとめて私はアストナージさんが待つはずのドアを開いた。

「……すみませんアストナージさん、準備が、ちよつと待つて……」

「……中尉、急に失礼。話があつて来させてもらった」

……ばつの悪そうなブライト・ノアがこちらを静かに見つめていた。

思わず固まる。

「……失礼しました、艦長。お話願えますか？」

自分でも驚くくらいには普通……の様な返しが咄嗟に出た。

……かなり冷静に取り繕ったつもりだが内心この言葉どうり穏やかな訳が無かった。

ふと腕の時間を見る、アストナージさんが来る予定だった時間ぴつたりだった。

アストナージさんならきつと取り繕ってくれる。……時間を稼がねば。

(……早く着てアストナージさん……！)

焦っている間にブライト艦長は次の会話に移った。低いのに通る声が通路に響く。

「最近変わった事は無いか？ ケーラ」

「アムロさ、た、大尉とあの後個人で話をしました。やはりあの人の話は勉強になります」

「そうか、アストナージとはどうだ？前に頬を叩いたそうじゃないか」
軽い雰囲気話してくれているのだろうが、やはり何とというか一つ一つが重い。これは勝手な被害妄想だが、何気ない話ですらこちらの事を勘ぐっているように聞こえてしまう。

(……アストナージさん……！)

「いえ、アレはタイミングが悪くて……」

「叩くのはあまり良くないな、アストナージはあの後珍しくかなり落ち込んでいたよ」

「……アストナージさ……が」

落ち込んでいた、アストナージさんが。あの時の、資料室で会った時はあんなに気さくでいたのに……。

そう見えていたのだ、アストナージさんはケーラさんに小さくなった自分を見せたくなくて、何時もと話し方も性格も違う、ケーラさんに対して小さくしまい込んだ違和感もだまって、そして泣いたのだ。
「そう……ですか」

馬鹿だ、私は何と馬鹿だ。アストナージさんばかりに重荷を背負わせていたのだ。初めて指摘して黙ってくれたのも、真剣に相談に乗っ

てくれたのも、アムロさんに話を付けてくれた時だって全部、全部あの背中じゃないか。

(それを知ってアストナージさん早く着てなんて……悠長に言える訳が無い)

私は、私は守られるだけだった。唯々皆に守られるだけの、小さな、小さな自分だ。

「深入りする話じゃなかった、すまない。ケーラの調子が悪そうだという声が聞こえてきてね」

強くなりたい。そうだ、私は、私は誰かに守られるだけでこの世界を、アストナージさんやアムロさんが居るこの世界を終わらせたくないのだ、生き抜いて見せるのだ。生きて、無様でも生きて少しでも多くケーラさんの手掛かりを手に入れるのだ。

……そして、ようやく私は目の前に佇むあのブライト・ノアに小さなある一つの決意をしたのだった。

「……私は、ケーラ・スウ中尉は大丈夫です、艦長。大切な人たちの為、殉ずる覚悟であります」

私は、私はこの世界に、この世界の一人として優しい人たちを守り抜き、そして元のケーラさんの手掛かりを見つけて見せる……！ 次の言葉は、これが私の……!!

「来ますかね？ ロンド・ベル」

「来るさ、ナナイ。奴は、奴等は必ず私を止めようとする。何度頭を潰しても、いかなる策を廻らせても、それが十全な戦力だとしても、矢が突き立ったその体で私の喉元を目掛け、その崩れた頭で牙を食い込ませる」

「それがロンド・ベルだ」

「……私は、私はこのロンド・ベルで、アムロ大尉に次ぐパイロットとして皆を守ります、守って見せます!! それがケーラ・スウでありますっ!!」

……この差別と、争いだらけの世界で一つの希望を掴む為、私は皆

を守り抜く。そうこれは私の、この唯々広い世界を巻き込んだ小さな、小さな決意だ。

……月面都市フォン・ブラウンの片隅、あるMSのシートがめくられた。

……RX-93レガンダム。それは伝説のエース、アムロ・レイが搭乗した最後の機体。

……ある女性によってゆっくりと開かれたそれは、地球と宇宙の未来を掛けた重く、分厚い布一枚だった。

——機動戦士ガンダム 逆襲のシャア、開幕。

一章 ケーラ・スウのエゴイズム

SALLY — 出撃 —

星屑と蒼い星と太陽だけが輝く闇の中で私は何時もの様に緊張するでも、不格好に怯える訳でもなく、ただ露一つも落ちない静かな池の様に澄み切った眼で自分の手元を見た。

……自分でも驚いたが全く震えていない。

隣のモニターを見れば丁度、整備兵が私のジェガンの発進までの最終調整を終わらせたようで後は私がいつの間に覚えていた手癖をして恐らくはケーラさんの技術と寸分変わらない（アムロさんが私のシミュレーターを見て驚いていた）肘から上が手慣れた様にジェガンタイプのスラストアーレバーへと伸びる。

「物語が進んでいるのなら、クエス……ちゃん？とアテナウアー・パラヤがシャトルでロケットに向かっていている所かなあ……ハサウエイ君……か」

考えれば考える程イベントだらけで私の頭は三週半くらいしてしまったのかもしれない。驚くほどに冷静だ。

……5thを占拠してからのネオ・ジオンの動きは非常に早く、シヤア・アズナブル指揮の元行われるそれは、まさしくの電光石火と呼ぶにふさわしかった。

あれよあれよと地球連邦は簡単に出し抜かれ、5thルナは地球へと軌道を取り落下へのほぼ最終段階、ロンド・ベルは最後のMS戦を仕掛ける、もちろん私こと、ケーラ・スウも出撃……という局面だ。何か力になればと持ってきたサイコフレームがきらりと光る。

今は、切羽詰まった私にとっても大きな山場の一つという事になるが私は静かだった。きっと今は恐らくマラソンでいう最初の息苦しい所を抜け、今はただ走る事の喜びを感じ、目標を定め楽になった段階の陸上競技で言うランナーズハイという奴になった所なのだろうか。

山場……か。色々あった、ああ色々。私はここに来てからの事を走

馬灯のように思い出す。

「……不吉だな。まだ死んでも居ないのに」

……この世界に居る事の喜びは、守りたい人たちができた事だろうか。しかし素直に嬉しくはない。何故なら道のりが苦難過ぎる。これでまだ劇中最序盤と言うから驚きだ。

眼を瞑って己の覚悟を思い出す。

「……撃てるのか？ ケーラ」

アムロさんが神妙な面持ちで私に問う。それを正直に今の心境を答えた。

「……撃てない……と、思います」

……人を殺す。そう思っただけで手が震え、心臓に伝染する。恐らく、それをするのはこの世界では一瞬かつ簡単だろう。だけれども引き金を引いた瞬間に確実に自分の心の何かを失う。そんな気がする。「でも、守りたいんです。……アストナージさんを、ケーラさんを迎える人たちを、出来ないだろうけど……アムロさんも」

我ながら何と図々しくも大きく広げたのだろう。後から思い出すととてもじゃないが大きな声で言えない余計なお世話を口にしてしまったのだと理解する。

「……でも、笑ってくれた、アストナージさんが、アムロさんが。苦笑いでも嬉しい」

ようやく私は二人に私から笑顔を届けられた。思えば二人にはずっと難かしい顔ばかりさせていた。アストナージさんは見せないようにはしていたが苦悶の表情だった、アムロさんは今後の対処を出来る限り考えて渋い顔をしていた、そんな二人が笑ってくれた。

私は元の場所に帰る事を諦めたわけではないが私の見ていてくれる人たちには出来る限り笑っていて欲しい。それが例え差別と汚辱に塗れた世界の中であつても、それが私の願いだ。

「君は撃たなくていい。だけど自分が銃を向けられた時は、引いても誰も責めないよケーラ」

アムロさんは最後にそう言っただけで自分のMSの元に駆けて行った。

「撃たなくても守れる世界……そんな世界あるのかな？」

最後に在り得もしない遊び事を私は口にしてジェガンタイプのシートに深く座る。

「……あつ、Gが掛かるから見た目以上に柔らかいんだ」

……今できる全ての仕事を終えた時。アストナージ・メドツソは祈るようにケーラ・スウのジェガンを見た。

彼の願いは唯一つ彼女の生還である。

ここで出来る事は全てやった。アムロ・レイを内に引き込めたのは最低かつ最高の条件である。アストナージの今の仕事はもうやるこ
とが無い。自分にできるのはこれだけ。たったの、これだけ。あとは
精々もつと自分は他に何かできたことがあるのだろうかと無意味に
自分を責める事だけであった。

「頼む、神様……」

そんなアストナージを見て船員たちは唯、この作戦で一人でも多く
死者が出ない事を、出さない事を己の心に誓う事しかできなかった。

……この白いパイロットスーツに着替える時が己の闘志が一番燃
ゆる時だとアムロ・レイは知っている。

この色は自分が背負ってきた証だからだ。否、彼は背負わされた。
ニュータイプと恐れられ、それと自分の腕しか盾にすることしかでき
なかった人生だ。ひと筆で変わらぬ黒も何度も、何十度も重ねて白に
塗り潰してきた。そんなゆらゆらと燃える様な鉛色を孕んだ白き鋼
の色。この色こそが己の魂の色なのだ。

しかし、そのスーツに袖を通すと不思議と今から銃を向け合う宿敵
シヤア・アズナブルの事を思い出さなかった。

少し前まであそこまで自分の手で終わらせてやろうと意気込んで
いた手が、スーツの中で握り拳から緩やかな平手へと変わっていく。

「……俺も軍人だな。自分の宿命より巻き込まれた命か」

アムロ・レイはまだ自分がキリングマシーンに成り果てていない事
に心の底で小さく安堵した。

「カタパルト発進用意！」

私は少し前の人生では一度も聞く機会は無いだろう言葉を耳に入れると、脳が覚えられる情報量を超えていそうなスイッチ群を攻略し、レバーを手取る。

前方のジエガンが次々に星の海へと、か弱い灯をともして進んでいく様子がカメラに写っている。間もなく私もその明かりの一つとなる。

「……これを押せば出撃だ。……もう戻れないかもしれないんだ。」

私なんかが言うには非常に申し訳ないがケーラ・スウさんの実力は一機で戦術を柱から倒壊させるような力はないし、智将の様な作戦で戦況をひっくり返せるような頭も私はしていない。

少しでも、足を踏み外せば先ほどとは違う、確実な死が待っている。下手に動いて邪魔になるのかもしれない。

「……でも……でも、私はね、私を助けてくれる人たちを、私を元の場所に戻そうと頑張ってくれる人たちを、守ってくれるいい人たちの姿を見て、ただそれだけなんて、嫌なんだ。私は我儘だから全部守るよ、私を守る人も好きでいてくれる人も、全部」

私の命を、火を灯す時が来たようだ。既に手に取っていたスラスターレバーを強く入れ込む。

「ケーラ・スウ、ジエガンで行きます！」

今までに体験したことのない衝撃が全身を強く押し付ける様に刺す。舌をかまないように食いしばり前を見ることも億劫なほどだ。二度も体験したくないような衝撃を味わう。パイロットと言うのは何時もこんなことをやっているのか、別の仕事を選んだ方がいいのではないかと言う失礼な疑問が頭を過ぎる。

だけどそこに有っても、私の灯は消えない。

光と闇

先頭を任されたケーラ隊の一人が後方を向くと、隊長のはずのケーラ中尉は後方に陣取っている。話通り少し変わったサマだ。

作戦会議中に聞いたところ、大尉からのブライト直々の作戦変更らしく、彼女の体調を見るに必要な処置との事。どうやらメデイカールームの検査結果も持って来たらしくと、そこまで用意されれば話を聞かないわけにはいかない。

「マニュアルよりちよつと位置取りが狭いかな。でも、何時もの中尉だ」

この位の変化程度ならば戦闘結果はそう変わりはないだろうと隊員は安堵の息を最後まで吐いた。だがそれは長年の信頼からくるものであつて、もしケーラ・スウが別人でもあれば話は違ってくるだろう。果たしてそれを知れば同じ顔は出来るのだろうかと意地悪に問いたい。

……私は真つ暗な海の中で小さく光り輝く月を探すかのように前のジエガンに張り付く。

アムロさんのリガズイはずつと先へ行ってしまった。この作戦、5thルナの核パルスエンジンが始動する前に破壊、または停止させるという時間制限のある戦いにおいて、アムロさんの程頼りになる一番槍は存在しない。

私一人の命より5thルナ落下による死者数の方がシーソーが傾いて宇宙まで飛びあがるが如し……いや、それを遥かに超える程大きい。それを踏まえても、わざわざ一人の役立たずパイロットをお守りをしている隙など、この作戦どころかどの戦場を見渡しても無いだろう。

仮にこの戦いで生き残ったとしても、今後アムロさんが付きつきりで私の介護をするわけではない。勿論理解していたが、心細さは生まれしてしまう。だが間違いなくこれは贅沢な悩みだろう。逆に私が頼りなくて同じ隊の人たちには申し訳なくすらある。

「…………ふう」

ミノフスキー粒子が散布された今の状況ではまともなレーダーは使えない。今の私はこの光、戦場へ向かうロンドベルの仲間達、ジェガンのバーニアから漏れ出る光に向かって突き進むしかない。

ミノフスキー粒子は散布することで通信障害を引き起こす目には見えない不可視の物質。この透明な物のせいでMSと云うマシンが誕生し猛威を振るつたこの世界に無くてはならない物だ。

目には見えないけどそこに有る物、例えて友情とか愛とかいう人も居るけどその前に目の前の空気のありがたさを知るべきだろう。身近な物への感謝が無ければ愛は生まれぬ。

……………などと遊び事を掻き立てていると急に、耳元で大きな雷撃の様な声が耳を抜けた。

「……………アムロ・レイ交戦に入った、宙域SS6！」

「……………通信が入った！結構近い！」

前方のジェガンが合図をする。

「ええと……………この合図は……………ママよっ！」

全く違う意味で叫んだ言葉だがこうでもしないと恐怖で押しつぶされそうだったことを言い訳にしておこう。

……………闇の中一筋の光が見える、よく見れば後ろに同じような線が幾つも見えるが、最初に目に入ったこの光だけは彼方から見ても、不思議と輝いて見える。

「……………これが限界か…………… 敵！」

通常のパイロットなら敵どころか味方も見失ってしまいそうなほどのスピードの中アムロは手慣れた様に手中のハンドルレバーを動かす、MA形態のリガズイを紙飛行機でも操るかの様に機首を上げ慣性を殺す。と、絶妙な推進量で先ほどの猛スピードが嘘の様に力なく進み、さらにそこから緩やかに右にローリング、MS二機分ほどの岩石に鮮やかに隠れた。

簡単に説明したが、この動作だけでも神業と呼べるレベルの動きであり、真似できようパイロットが居るものならそれは世紀の天才か人

類を続ける覇者かの二択だろう。

「……前方にギラドローガ一機、自分なら簡単に捻れる」

報告を済ませたアムロは息を突く間もないまま敵に突進した。無論それは5thが理由で通常ならほぼ有り得ない選択だが自分の腕を信じアクセルを踏んだ。

「……ん？」

ここで、ミノフスキー粒子でおぼつかないレーダーがようやくよく鳴り響いた。

シャトル型のMAがこちらに突進してくる。

「ロンド・ベル！」

そしてギラドローガのモノアイが捕らえたそれはまるで――

――爆発音、間もなく。

「……カーフ・ソウがやられた！ お前たち行くぞお！」

一人の命が破壊され、誰かが叫ぶとその周りに隠れるようにしていたギラドローガが集まった。

「三機もいた……！ 困もうとして……！」

人間とは思えない速度で反応したアムロはトラップだと知った時、その場から離脱するでも後方に逃げるでもなく、大きく旋回、逆に向かっていったのだ。

案の定、移動の隙を狙われ好きな様に撃たれ放題になるがアムロ・レイはこれが決してミスではないと知っている。

「くそっ、糞！ 舐めやがって！ 落としてやるっ！」

5thルナが微量に残した岩石群を囷にしてすると抜けていく、リガズイが弾幕を抜けて直ぐにギラドローガの方を向き、またも愚直に敵に突進。これは岩を盾にしているとはいえアムロ・レイらしくない一か八かの戦い。

……否、これは自分に弾を撃ち続ける続けるギラドローガ達から身を守る為に利用している岩の一つに向かってアムロは突進している。アムロ・レイには策がある。

「……落ちろ！」

そしてそれは、MARIガズイ機首に装備されているこの機体最高火力メガ粒子砲を、ギラドーガ達がわざわざ丁度良くなるまで「破壊してくれた」岩屑を巻き込むようにしてMSをズバリ撃ち抜いた。

「ばっ………！ 化け物だっ………！」

全く持つて例えるのはそれしかない。

「……アムロ、敵と交戦、四機撃墜。恐らく偵察要因だ、敵を落としたこの宙域から5thルートへ向かう」

「……へ？ 撃墜って……？ 四機も……？ 三十秒経つた……?!」

「……この先は5thが落としていった遮蔽物の無い戦いになる、ケーラは特に注意しろ！」

「……は、はい………」

通信越しにもっと気を入れろと怒られる。これは中々に恥ずかしい。だが確かに気は少し入った。

アムロさんはやはり最強だ、ここまで強い人が味方なんだ、なんと心強い。アストナージさんも指折りのメカニックマン、この二人が仲間なんだという事が今は唯々私の心に少しの安心を与えてくれる。ロンドベルの人たちも、おまけにブライトさんまでもいる。

杞憂だったこの人たちが居れば、私なんか居なくてもシャア・アズナブルの作戦を……。

——ピシユーン!!

突然後ろのジェガンがライフルを放つ。さらにその後方の同機体も真似するかのように銃を撃つ。そうすると味方が銃を向けた反対方向から何故か同じように、同じ光が……。

「……え、その方向に味方のジェガンなんていた………」

味方の怒号が電撃の様に足から頭上まで走る。

「……ケーラー！ 何やってる！ 宙域DS6に敵だ！ 撃て!!」

まるでその電撃が本当に感電したかのように体中をザクザクと突いて回る。体が、足に力が入らない。

先ほどまでの余裕が嘘の様に震える。手が、足がまるで私の物などではないかのようにぴりぴりと痺れ始める。

……モニターの敵は私を狙っていない。大丈夫、落ち着いてやれば……。
……息継ぎをする、……息を吸っては吐き、吸っては吐き、……だ
けどいつかの時の様に肺に酸素が入らない、入ったような気がしない。
……変な息遣いになっている事は自分でもわかる。治さなきゃ、
普通に、普通に治して、みんなと一緒に敵を撃たなきゃ……！
ゆらゆらと震える指がトリガーへと掛かる。そうだ、思い出さな
きゃ、あの時の決意を……。

モニター越しのギラドーガの腕が取れた。もう少しだ。

……私は……私は、アムロさん達と戦うんだ、アストナージさんを
守るんだ！ ……こんなところで立ち止まってられない！ 敵を
撃たなくてもできる事が在る筈だ！ ……例えばワザと外すように
打つても銃なら牽制になるはずだ……！ 少しでも弾幕を張らない
と……！ 撃たないと……！

——デモソレデ死ンダラキミノセイデモアルヨネ？

その言葉が心臓を駆け抜けた時。

「……いたい……」

「……っ!!」

瞳の中に泣いているあの子が映る。心が揺れる音がする。痛い痛
いと頭を押さえ助けを呼んでいる私の友達が、台詞が頭の中でぐるぐ
ると周る。そうすると私の頭もぼやけてきて……。撃たなきゃ！
今あの子に構っている暇はない。逃げたいなら勝手に逃げればいい。
撃たなきゃ！ じゃないと私が撃たれて……アムロさんも撃たれて
……アストナージさんも撃たれて……みんな死んじやうんだ！ 撃
たなきゃ！

敵が銃口を別の味方に変えた、狂ったように乱射している。それを
見て私は射撃体勢を取ったまま、ぼーつと間抜けに立ちつくしてい
る。周りの味方は皆で敵を攻撃してギラドーガはボロボロになって
……いや、イジメてい……る？ これは何……？ なんでみんなで一
人を殺そうとしているの……？ なんで？ かわいそうじゃないの
……？

「……みんな、私をいじめてる……の……?」

ジエガン部隊がライフルで応戦する中、モニターに映るターゲットの
のはずの鉄屑間近になったギラドールが最後に私を見て喋りかけた。
「たすけて……」

心が折れた音がした。

「やめて……やめて……やめてええええええええええええ!!!」

……私は、人生で出したことも無いような声で叫び、震える手で味
方のジエガンに向かって銃を抜く。

霧

「……やめてええええええええええええええええええ!!!!」

トリガーに指を掛け、味方のジエガンに銃を向ける、錯乱して引き金を引こうとするその刹那。頭の中でアムロさんの声が頭を駆け抜ける。

「君は撃たなくていい。だけど自分が銃を向けられた時は、引いても誰も責めないよケーラ」

そうだ。アムロさんだって銃を向けられたら撃てって……。

少し前の事を思った時、脳みそに直接針を刺されたかの様な痛みが走る。

「……つつ!!」

……目を開くと霧の中にいた。

今にも泣きそうな酷い顔で辺りをゆっくりと見渡す。霧がかつた森の様な場所、地面は薄く雑草が這っていて、土がむき出しになっているところもある。私はその真ん中にぼっと突っ立って居る。勿論先の景色は見れない。帰り道は今しがた自分の手でなくしてしまった。

全てを諦めた足でとぼとぼと一人で歩く。ふと心に思う。

私は何て事をしてしまったんだろう。みんなの期待を裏切って、自分の帰る場所も失って、誰も守れなくって、自分は変わったと思ったのに何も変わらない。

迷い込む。ただ朝日を探して同じ場所をぐるぐると。そうしていると気付いた。

「ここは……。そうか、私みたいに行き場が無くなった人が最後に来る場所……」

理解して、今までの事を思い出して疲れて苔の生えた岩にぺたと座る。少ししたら風も冷たくなってきた、心の中も焦りから諦めへと変わってきた。黒く冷たい何かがじわじわと心を食べていく。

穴だらけの心を突かれて、溜めていた涙が溢れ出してしまった。

「ごめんなさいアムロさん、ごめんなさいアストナージさん。私は馬鹿だ、やつぱり馬鹿なんだ。できもしない事を無理やり自分に嘘ついて引き受けて結局、混乱させるだけ混乱させて……」

疲れと後悔で、重力に引かれたようにその場から一步も動ける気がなくなつた。手の感覚が無くなつてきた、喉もカラカラ、食料はない。

「……体が重い」

……しばらくしてぽたぽたと地面に落ちていた涙の痕を赤い顔をしながら靴でごしごしいじくると、いつの間にやらその足に人型の影が掛かった。

顔を上げると何やら人型がこつちをすぐそばで見つめている。

人型では伝わらないだろうから、その人の様子を詳しく話すと、まるで濃い霧の中で浮かんでいる人を見ているみたいに形が不安定で本当に影だけが見えるなんとも魔訶不思議な……人？　するとその恐らくの人物が話しかけてきた。

「やあ、緊張のし過ぎだね？」

「……はい。みんな不幸にしてしまいました」

何故かその人に、その影が喋りかけてくることに私は驚きもせず答える。きつと誰でもいいから話を聞いてほしかったのかもしれない、例えそれがもしもの人でなくても。

「アムロ・レイは何もしてくれなかったの？アストナージは？」

「みんな、みんないっぱい頑張ってくれました。それなのに私は……撃つ相手すら間違えて……」

さつき涙は流したばかりなのに、また泣いてしまう。影は私を糾弾するでも叱るでもなく、ただ問いかける。スカートは涙でぐしゃぐしゃぬれだ。

「そつか……。でも間違えたつてことは、直すこともできるよね？」

「ねね、大尉の言葉をよく思い出してみてよ？」

「……はい？　アムロさんの……？」

その言葉を口にして私はあの時思い出せなかった、味方に銃を向けヒステリーを起こしたという無様な紐で雁字搦めになっていた記憶

を解いていく。

君は撃たなくていい。だけど自分が銃を向けられた時は、引いても誰も責めないよケーラ。

「アムロさんはそう言っていた。……ただそれだけ……？」

「……。……ちがう。……アムロさんが言っていたことはそれだけじゃなかった」

その台詞の後……

—— 出撃前MSデッキ。

「……でもねケーラ、僕は君に誰も撃ってほしくない」

素っ頓狂な顔をする私に、アムロ・レイはやはりと言う顔をして、唇の左横を少し吊り上げて笑った。

「……君は、人の為に無理をしてしまう人だ。俺は君ほど素直じゃないが、自分もそうだった。素直じゃないから逃げ出したりもしたが」
「その中で、悔し泣きしたり、誰かを好きになったり、新しいだれかと出会ったり、その自分を変えていく、成長していく日々の中で唯一自分に要らない物があつたとすれば……」

「……戦争だよ、ケーラ・スウ。だから君に撃ってほしくない」

……手が震える。言っていた、言ってくれていた、私の為に、私の事も考えて……。言ってくれてたのに私は自分の想いばかりに目が言って……！

「……馬鹿です。私って本当に馬鹿……」

後悔はし過ぎているつもりだった。両親にもっと甘えられなかった事、元の世界の事、あの子の事、アストナージさんの事、そして今。……だけどそれと同じくらい、いや今はそれ以上の後悔が押し寄せてくる。

なんで錯乱したのか、なんでその前に考えられなかったのか、なんで思い出せなかったのか、そればかりが頭の中で浮かび上がり一つも消えないまま強く残る。

「今のままでいいの？」

人影が私に優しく話しかける。私の持っていたサイコフレームよ

りは少し強い声だが、通りの良いまるでどこかで聞いた事のあるような艶のある声だ。

涙が流れっぱなしの私は、選択を求められた。

そんな私は止まらない涙をぬぐっては拭ってはの不細工で格好の悪い姿だが、心には強い後悔と、ある思いが火に掛かっている。

「……いや……です。私は、あの世界で私に出来る事をしたい……です……!」

涙は流れたままだったが、私にはまだ終わりたくないという気持ちが確かに体の真ん中にある。

それを見て「そっか」と恐らく笑った人影が私の頭をなでた。

「……実はまだ終わってないんだよね。今の君は味方に向かってガングリップを握っているだけ」

「でもさっきの君はこのままだと撃っちゃうだろうね。でもいまは……どうしたい?」

もう私の言葉は要らなかった強く、強く心に思う、今の私はどうしたいのか? そうだ、今の私は。

……周りの景色が黒く崩れて行く、その景色は唯の真つ黒に見えたがよく見るとぼつぼつと小さな光たちが見える。端には大きな青い星が見えた。それに沿うように私は手の平をかざす。

崩れて行く景色の中で人影が笑って散っていく、顔は霧がかつていたがまるでこれからの未来を見通して笑っているように見えた。満足そうに……最後にこう言い残して。

「アストナージによろしくね、ケーラ・スウ」

「あなたは……!」

……かざした手の平の先その最後の言葉を私は手では無く言葉で掬い取るしか出来なかった。

……ボロボロの、鉄くず同然のギラドーガがこちらに向かって同じく手を突き出している。

…：私はそれを逃げないように、目を逸らさないように差し伸べていた自分の手を下ろしてしつかりとこの眼で命の散る様を捉えた。

こちらに手を向けているのは未だに戦おうとしているのか救いを求めようとしているのかは解らない、装甲の隙間から火が出て紫色に散っていくその様。

その人は純粹な悪でも世界を騙す卑怯者でもない、ただの命令された普通の人だ。私と違ったのはただ仕事と立場だけ。その命が散る様を、そのあたり前を、ただ目に焼き付けた。

腰のサイコフレームは淡く緑色に光り輝いている。